

あまじ

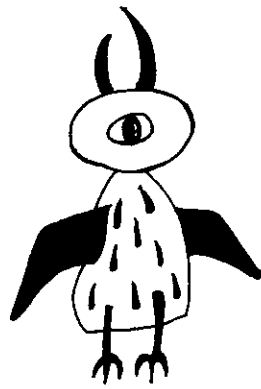
第14回
合衆
馬



S W V O B 会 会 報

1
6
8
4

つまや



第 14・15 号

あの時の風が忘れられない

KAZ

♀

あの時の風が忘れられない。

春が もうすぐ来そうな

湖畔に吹いてた風。

目を閉じて 思いきりすいこんだ空気。

穴ぼこのあいたセーターを

やさしく通りすぎる。

あの時の僕の姿を雲の上から誰かが見たら

気持ちよさそうだな

くらいことは 思っただろうな。

♀♀

昔 テレビでみた

何この映画の一シーン。

みずばらしい身なりの

大人が三人 手をつないで

「来たぞ」「乗るぞ」 「セーの!!」

同時に襦ひあがると

春風にのって

山上の高原まで ひとつとび。

あんな風だ。

♀♀♀

ひとりで山に行く時は いつも、

風が友だち。

すてきな風を見つけたい季節が

またやって来る。

「やまぐつ」もくじ

あの時の風が 忘れられない-----KAZ	
会報発行にあたり -----諏訪部信一	3
鳳凰三山単独行の昔話-----佐藤 通	4
ひさしぶりの山へ -----諏訪部信一	10
(特別寄稿) 変質の構造-----内山正美	15
丹沢の山とランニング-----悪原義範	20
淵沢は飲み頃サインで待っていた---二瓶 祥	21
星と雪の間に -----shō	25
北海道 一九八三夏-----倉地 哲郎	26
花あり、温泉ありちた山行記-----小宮 豊	34
お月見 山行 -----江成利一	38
低山逍遙 -----榎田一典	40
ファミリーハイキング-----諏訪部信一	44
ハケ岳 正月1984 -----佐藤 通	47
OB会番外スキー行-----小宮 豊	51
尾瀬山行 -----諏訪部信一	53
上越スキー -----諏訪部信一	56
筋右衛門漫遊記 (=)-----骨皮 筋右衛門	59
OB会の歩み -----諏訪部信一	62

晩秋に-----KAZ	76
-------------	----

58・59年度総会	77
第15期OB会役員名簿	78
S.W.V.O.B会規程	79
住所録	84

会報発行にあたり

会長 諏訪部 信一

OB会の第十四、十五合併号の発行につきまして
会長として、雜感を記させてもよいました。会員の
人達にとって、会にとって、会報は、その活動の記
録であり、現在、いろいろな問題もありながら、会
報「やまぐつ」が十五号を迎えると言うことは、う
れしいことと思います。数年前から、編集、発行に
時間がかかり、一年を過ぎてしまつてから、会員の
手許にとどくような状態が続いていました。本年も
当初は、昨年、八月頃を発行の目安として準備を始
めました。が、原稿の不揃等にもより、発行がずるず
るしてしまいました。五十八年度の総会報告等を編
集しましたが、発行出来るのが、四月頃と言う時期
になつてしまい、編集の役員とも協議の上、十四、

十五号合併号とし、五十九年度総会報告も入れた会
報とすることにいたしました。合併号の爲、内部記
事も二年に渡り、読みにくい点もあると思いますが、
今回は、今後の編集も考慮して、思いきりました。
今後は、前年度の活動、本年度の総会報告を含めま
して、毎年六月の発行を計画してまいります。会報は、
会員の活動の記録です。会の活動に對して、各個人
が積極的に参加していくのと同様、会報の編集にも
積極的な参加を望みます。OB会も十五年を迎え、
会員構成も変化し、今後、より一層の発展をしなく
てはならぬといふと私自身も考えています。が、会員の
人達の一層の協力を期待しているところです。
楽しいOB会としようではありませんか。

鳳凰三山 単独行の昔話

佐藤 通

4限目の講議が突然、休講とな、た。1限目の終、た時に発表された。この日は、1・2・4と講議の予定であ、た。2限目をフケて山へ行くことにする。さて、どこにしようか、鳳凰にしよう。いまなり、近くのやつに「ちよ、くら鳳凰に登、マくらあ」というと、一人が「ホウー」もう一人が「オウー」とい、たかどうかは、判らない。うちの学科(林学科)では、ほとんどの人が山に登、た。ロックからハイキングまでいれると全員とまではいかないが全員である。水上に校舎があり、藤原湖畔に演習林があるので、その最高峰・高取山には、ほとんどの人が登、マいる。そこから、谷川や武尊^{たけみか}、至仏が見えるのである。

ときは、10月10日前の連休にな、マいたかは、よ

くわからんが、秋の紅葉シーズンである。列車は、相模湖駅から乗、たので、ドン行のはずだ。うす暗い時刻のようだ、た。穴山までのキップを買、た。番号が2ケタだ、たと思う。穴山には9時頃ついたはず。ホームに降りたのは、他に3、4人。階段を登り、ま、すぐ歩くと改札口である。そこには、佐州訖りのみ、ちやん(駅員)がいる。この駅から歩くつもりだったので、御座石鉱泉までの間にある峠のことと聞く「むかし、みんな峠を越えて山へ入、マ、たもんずら、今でもへいさずら」とのこと。でもやぶはあられい。待ち合、い室には、誰もいない。通だけである。ベンチにシェラフを出し眠、る。人へのざわめきで目玉さますと、空、い、ぼいの人である。外まであふれてい、る。シェラフで眠、マいる人もある。いつの間にか大変、にぎやかにな、マいた。おそろく最終ドン行の人たちだろう。そのうち、マ

イクロバスが来た。鳳凰小屋の予約を受けたり、運賃をもらったり、しばらく騒がしい。通は、寝ておられず、うるせえやつらだといったそうなので、入の回りとうろつく。バスもいそ静かになつた。荷物をまとめて出発。女の人まだ残つていた。

犬に吠えられながら、夜明け前の暗い道を歩く。はるか後から例の女の人らしき人がついてくる。

橋を渡り、登り口の集落をすぎると、夜が明け始めた。道標は、古く役に立たない。林道から山道になる所で道がわからなくなる。どこに入るのか迷う。

あせ、でもしかたがない。朝めしにする。後から歩いてきたやつらが追いつくが、やはり道がわからないうちである。林道は、いづれか涸沢になり、エンテイにはばきれる。どうも違う。地図も、と手前から山道になつてくる。この道がどうだろうと思われ、所々、ニギリめしを食つていた通である。戻

ってきた者どもが、通に道を尋ねた。「ここを登り、行くのをすかし、たぶん、どうだろう。女は上りながら通に答えた。先行した者どもの後を追う。すぐに倒木が多数あり、道をふさいでいる。ここから、ごつていける者どもと、通はかんたんに抜き去る。

小さな尾根に出た所で道が二つに別れ、一つは尾根筋、一つはのり下、という。尾根道を行く。

しかし登るにつれ道は、なくなつてしまつた。やつちも通の後にしたが、まぢか、尾道へ入つてきた。先に、たものが正しい道を行く、とは、限らないのである。道は、なくなつたが、ブッシュは少なく、尾根も、どう遠くはなさそうである。通は、一気に登りつめた。峠道は、たぶん低い所を越しているはずである。100m程下つた所に道はあつた。しかし、かりれた道である。樹々が頭上を覆いつつ、トンネルのようである。先人が多勢通つたため、道は深くえぐられてい

た。やつらが尾根に出たらしく、「おーい、どっちだ。
叫ぶ声がする。」「ここが峠だぞー。」「道ぐらい自分
でみつかりゃいいじゃねえか。」「自主性のないやつら
であつた。峠から川までほ、わずかなであつた。登、
た高さから比べるとあ、けないくらいだ。川をどう
や、でこえたかたれたが、通のことだから簡単だ、
たにちがひない。鉱泉までは、け、こう長い林道を
歩かぬばならない。」「バスの方がよか、たな、などと
つぶやく通であつた。やつらは、青木鉱泉から沢が
いに鳳凰まで行く予定である。

御座石鉱泉が登山口となつてゐる。道標に導かれ
て進むと小屋の入口である。小屋に用はない。しな
し、矢印はあ、ち、通は、小屋のそばさんに声をか
ける。「道は、こ、ちですか。」「そこをぬけて、マ下
さい。」「うす暗いわたり廊下をぬけるとそこは、登山
道だ、た、落ち葉にうもれた道が斜面にへばりつい

てゐる。駅からバスで来た人たちは、統て通過し、
林は、静寂をとりもどした。風は、枝から過ぎた夏
を運ぶ。足もとに落ちた葉をふむと夏の思い出がは
じけろ。(ウ!! センチメンタルになつてしまつた。)
燕頭山にほど近い所でめしだ。通は、おもむろに
ザックから白米を出す。半分コンフェルに入れ、甘
納豆、塩少々、水と適量入れて五分煮るとアズキ
めしの出来上り。やや甘いがつまい。ハケ缶もよく
見える。かすみの上に頭を出してまれば顔、お昼を
過ぎた頃から人が多くなつて、また、ダケカンバやカ
ラマツなどの黄葉がみごとで、人々は足を止めてなが
めてゐる。コメツバの間からは、駒ヶ岳も見えてい
る。道の平坦となつた所からは、地藏岳が見え出す。
山頂のオベリスクもよく見える。小屋は、もう少し
である。

通の着いた頃、小屋では、多勢の人でごつたがえ

していた。通の宿は、離れの馬小屋の二階という所
だろうか。天井の低いす暗い所である。「ひびく
場所だ」文句正しいながら場所を確保している。晩
めしを短時間で済ます。冷えたビールを買、まぎて
やるくーカンぐい、と飲んで寝てしまう。

次の朝、雲はややあるが、雨の心配はない。人々
はもう大半が起きて、出発の準備をしているのに、
通は、まだ寝ている。おい、起きろ。起きるとす
ぐに出発。朝めしをす、っている人々を横目に歩きだ
す。地蔵岳には、スノコパーティーいる。オベリスク
は、昔、鎖がついていたところだが、落ちる人々出るた
め取りはずしてある。ただシュリングが上郡に残、
っている。花コウ岩のスパラしい山頂である。モルゲ
ンロートは、わずかに終り、太陽は顔を出さずに
雲の中。通は、稜線に出た、中型のカメラで北岳を
写している人がいる。「すごい壁だ」バットレスは

正面にそびえているのである。しばらくカメラの人
と話をした。(へじつは、このカメラの人、後でま
た登場します。) 稜線からは、地蔵岳がよく見え、
後ろに駒ヶ岳と北ア連山、おっと、ハゲ岳もよく見
えてくる。観音岳は、ガスの中。「ムム、ライオ
ウ」カメラを出して写してみたら通だが、鳥は、
飛ぶもの、逃げるもの、うまく写せな、たようで
ある。

白い場所に出た。花コウ岩が風化して砂にな、た
所である。「まぶしいなあ」雪の上にいるみたいだ。
観音岳と、写真だが、一枚も写、っていない、オ
ーバーのものば、かり、どつしたところか。
「そんなことカメラにきいてくれ」稜線は、衆に歩
けて足がよく進む。葉師岳もあ、と通過。ここは、
富士山が良、北岳は、相変わらずスパラしい。間ノ
岳から渡鳥も見えてきた。谷間にガスがけ、山の

高々をひき上る。

樹林帯に入り、またカメラの人と会う。山火事跡からのながめは、前景・遠景とよくマッチしてなかなかのものである。通は、その辺りで一人の山女に会った。彼女は、東京から来たという。美人である。二人（女二人）で来る予定だったそうだ。そんなこんなでおしりペリしながら夜叉神峠。カラマツ林の下り道。「オッ、ヤジだ。」落葉の道の山女。「後姿がいいねえ。」彼女は峠からバス。通は、さらに歩いて芦安温泉へ。その途中、またまたカメラの人。彼女は、福島の人で、宇達太郎山の近くに住んでいるという。フロへ入り、ビールで乾杯。スキーの話をする。通は、この時、まだスキーをしたことがない、たのである。どうやらこの話を聞いてスキーをする決心をしたようだ。テレビでは、日本シリーズ、カープ優勝、おもしろ楽しい山のフィナーレである、

た。

◎ 高山植物の思い出 野っ原人

「何で山へ行くのでしょうね。」ガンガンの人なら登るのが目的ともなうが、多くの人はそれはそうではない。非日常的なものを求めて行く人たちが多いのではないが、中でも高山植物に会いに行くなんていいですね。

5/ ムシトリスミレの章

印象によく残っている花は黒部のムシトリスミレだ。場所・時間・状況などまさにベストマッチ。口元のタル沢出合、時は夕刻、雨がシトシト、ルートを探しに行、私は岩場を登り、そのテラスへ手をかけた時、又ルとしたものを感じ、思わず手を引いたのである。た、へびでもさわったのかな。思いその気配をうかがっていた。しかし動物のいるようすはなく、みぎろみぎろのぞいてみた。

すると目の前二〇センチメートル程の所にむらさ
きの花があるではないか、崖の中腹のバンドにみ
どりのコケが敷きつめられ、そこに一面ムシトリ
スミレが花を咲かせていたのである。静かな身ぶ
ろいを感じた一瞬であった。

以前会津駒ヶ岳から尾瀬へぬけた時、この時は
原のヒメシヤクナゲが目的であった。メンバーは
四人、うちに広志に近野さん千秋さん。道中は惨
憐なものであった。途中、ケニカ別れしそうにな
り。まあいろいろあった。だいたい若い男二匹
と昔の娘二人であるから性格の一致をみるのはむ
りだろう。でも山へ入りツバメオモトやシラネア
オネなど現れるともう気分は最高である。原に入
り花の写真ばかり撮り、ついたら千秋さんに言わ
れてしまった。『佐藤君で私たちをぜんぜん撮り、

くれないのね。』しかたなくバチリ『千秋さん目
をつぶらなりましたよ。ヒメシヤクナゲはみごとにじ
うたんでした。二週間前にやはり原に来たのだが、
その時はまだまだ花のハの字もなかったのだ。こ
の花の学名、アンドロメダです。

ひやしぶりの山へ

諏訪部 信一

深夜の橋本駅から電車に乗るのはひやしぶりのことであつた。一日の仕事を終えて、今から山へ行くと思うと、夜の人の少ないホームは、何となくしどろしどろ、はなやかに感じられる。八王子からの急行は、お盆休みにもかかわらず、わりとすいていて通路へすわれる程度のコミようだつた。夜行の急行へゆづれていると、それまで、私の身体の中の片すみでねむっていた何かが目さまして、ばんやりした中にも、これからの旅の楽しさをおしえてくれていた。うとうととして、目がさめると、列車は辰野へ近づいていた。しんと静かだつた辰野の駅へ私達を乗せた列車が到着すると、ケイ光灯の明りの中で、人々が、や々と明るさの見えるはじめた星空を

仰ぎながら、列車の乗り換えをする。その人達と一緒に私達も、飯田線の始発列車へ乗り伊奈市へとむかつた。夏の夜明けは本当に早い。辰野で朝の明るさをやつと見つけたと思つていたら、伊奈市へ着いた時はすっかり夜が明けてしまった。昭和五十七年八月十三日、私達は中央アルプス駒ヶ岳への山行を開始したのである。メンバーは、「ハリキリ熊さん」の斉藤正雄君、「にっこりぼうや」の榎田一典君、「むっすりぼうや」の川島菊夫君、「ギャースカあねご」の平田恵さん、「にこにこおばさん」の中川雅代さん、「ぶりっこ番長」の桑田菊美さん、そして、「リーーおねえさん」の諏訪部千秋さん、最後に足手まといの私である。世代を超越したメンバーで、年令差十四才、平均年令二十才そこそこのメンバーである。伊奈市からは聖取の碑コースと言われる古いコースを計画しており、出発点の桂小堀へは

タクシーで行くこととした。伊奈市へ着いて、のんびりとしていると、一緒に降りた人達が先にタクシーに乗場へ並んでしまい、その最後へ私達、ところが新宿と違い、タクシーはさつともこないのです。

待つこと二時間、それでも我慢強く待ったおかげで何とかタクシーに乗って桂小場へ。記念撮影をすませていよいよ出発です。

七時五十分、ブドウの泉、九時五十分、ノタ場、森林帯の中の登りが続いていく、最初の予定の時刻になっても、大樽小屋へ着かない。思ってたよりも時間がかかるが、なにしろ、夜行で来ての登りである。荷物も重いし、多少ペースが遅いのはやむをえない

と思いつつ登りをかき進んでいく。十時三十三分、大



樽小屋到着、周囲は合変らず森林帯の中である。それでもいつしか周囲もひびけ、分水嶺へ到着する。

今までは違って、目の前に駒ヶ岳が大きく見える。

伊奈谷の町々も、目の下にうつすが見える。十三時を過ぎていたし、天候も思わしくなかったので、

駒ヶ岳までの予定を変更して、西駒山荘へテントを張ることとした。夜行で疲れている事も考慮しての決

定に、一同は元氣百倍、最後の力を出して、西駒山荘へ。西駒山荘へ近づくとつれて、にわか雨が降り、

夕立の気配濃厚である。十四時十分、西駒山荘到着、空をながめながら、大忙しでテントを張る。一段落

した所で、榎田君が西駒山荘へ届けを出しに行ったところ、何と、ここは幕営禁止とのこと。時折、厳

しく降るにわか雨の中、テントをたたき、最初の予定通り、駒ヶ岳へ行くことにする。それからの道程

の長かったこと。時折降り降っていた雨も時向と共に

やみはしたものの、駒ヶ岳頂上山荘到着十七時十分。
 夜行の山行としては、本当に登り一点張りでもよくぞ
 がんばったものだ、ひさしぶりの私などは痛感し
 たものである。西駒山荘から駒ヶ岳頂上山荘までの
 コースはお花畑も多く、濃が池が見えたり、楽しい
 コースのはずなのに、西駒山荘でのシヨックが抜け
 きらず、最後のきついアルバイトの感じがしたので
 ある。それでも、今までと違って、急に人の多くな
 ったテント場の中で、八人和我合々一夜をすごし
 たのであった。

八月十四日、七時出発、昨日の人の少ないコース
 と違って、銀座の歩行者天国にいうような、にぎや
 かな駒ヶ岳頂上山荘を後にして、私達は宝剣へと向
 った。宝剣の岩嶺をすぎ、眼下に千畳敷のカールと
 ロープウェイの駅を見て、そして、そこから流れて
 くる、BGMを聞きながら、複雑な気分で宝剣岳を

通過、好天の下、松尾岳、熊沢岳とすぎ、今日の予
 定地木曽殿
 越へ向うの
 であつた。

十一時十五
 分、松尾岳
 到着、十二



時五十分、熊沢岳到着、午後に入ると、昨日同様、
 天候の方が思わしくなくなり、夕立の感が強くなっ
 てくる。熊沢岳から下り、最後の急な下りを、今日

の目的地である、木曽
 殿越の小屋を眼下に見
 ながら下り、十五時に
 木曽殿越へ到着、こ
 こで小屋へ行つて話しを
 聞いて、また一大シヨ



ックである。何と、ここは幕営禁止である。よくよく話を聞いて見ると、中央アルプスは、避難小屋が各所にあり、それを利用出来るので、一般シーズンの幕営は駒ヶ岳頂上小屋以外はすべて禁止のこと。空木の頂上を越したところに駒峰ヒュッテがあり、その下に空木小屋があるとのことであるが、今

からそこまで行く気力なし。



しかたがないので、大枚三千円を払って、小屋へ泊ることとする。お盆休みの為、小屋はぎゅーぎゅーづめ、それでも一人三千円とは、本当に損をした気分一杯、外を見ると天候は思わしくない。夕方から出て来た霧がすっぽりと私

すことになった。

八月十五日、七時、

小屋をゆっくりと出発。

大半の人達は早朝空木

岳へ登り、小屋へ帰っ

て、木曽側へ下山する

ようである。私達はの

んびりと朝食をすませ

ると、出発、ガスの中を空木岳山頂へ。八時空木岳

山頂到着、天候はガスから小雨模様になり、回復の

気配はまったく感じられない。最初の計画では越百

山を経由して、木曽側へ下山する予定であったが、

天候から考えて中止とする。雨と風の空木山頂を早

目に出発し、すぐ下の駒峰ヒュッテに到着、小さな

小屋であるが、山岳会が自分達で作って管理してい

ること、無人の小屋とは言っても、きれいに片



付いた小屋であった。しばらく休憩をして、駒峰ヒ

ュッテを九時三十分出

発、空木小屋を通過し

て下山を開始、途中、

コースが非常に荒れて

いて、アルバイトをし

てくれた箇所もあり、

考えていたよりも長い

下りであった。池山小

屋へつくここには、な

だやかな道にあり、少し先で林道へ出る。林道の終

点到着十三時、ここから林道を行かず山道を下るこ

としたが、途中で林道のかげの上へ出てしまった

り、最後の悪戦苦闘であった。駒ヶ根鉾泉へつき、

少し落ちついて来た天候を肌で感じながら鉾泉前の

バス停へ、二人でユースへ泊ると言う、中川さんと



桑田さんを残してバスで駒ヶ根へ、おふろへ入って

から帰ると言う横田君、川島君と別れて列車に乗っ

た。帰りは急行で帰って来る予定が、中央線が列車

の事故で大やの遅れ、辰野の駅前のラーメン屋さん

で、ステキな絵を見、のんびりと帰ることになって

しまった。テント場の調査不足や、天候や、いろいろ

あった山行ではあったが、一日早く下山したにも

かわらず、楽しい満

足した山行であった。

尚、ユースへ泊った中

川・桑田両名は、翌日

雨の為、どこへも行け

ずに帰宅したとのこと、

空木で下山して、まず

は正解であったと考え

ている。



本格的ハードボイルドアリション!

変質の構造

内山正美

<15期>
文

プロローグ

上質のハードボイルドとは、本来、読者の心の深層に位置する願望との強い呼応によって成立する。これは、言うまでもない事実である。そしてその願望の代表的要素として、変身願望が上げられることもまた同様であらう。本篇では、それを主題に掲げ、カーアクリシ。ンを盛り込み、渴ききった日常生活を潤す一筋の清涼剤が如く、読者諸氏の心と身体に訴えることを目的として書きあらわされている。

一章

我々は、今夜の獲物を求め、街を徘徊していた。金曜の、ようやく春を感じさせる夜のことであった。我々は共に、身体の一部に、ある種の異常を感じ

ていた。それは、自分の顔か、自分のものではない。うな、そういった感触であった。

あなたはかつて、このような体験をしたことが、あるであらうか。私の顔は、先程から、日常生活とは異なった形態と代わっているのである。私は当初、当惑と、底知れぬ恐怖を感じた。そして、それは、視覚によって倍増された。車のルームミラーに映る顔は銀色、目は窪み、耳はスボックと、まさに、カフカの変身の心境であった。

しかし、そんなものも、真夜中に背中の方からだんだんと、巨人になっていく恐怖に比べたら、どうってことはないのである。そう考えると、恐怖は次第に力へと変化した。それは、心の奥深く、無意識の世界において、具伴代わずにいた原始の雄叫が爆発するが如く、むしろは、彼の血風の雄、マスクマニ達か、マスクを着用することにより、自らの

力を、120%まで振絞るが如く、我々は、力を張ぎら
せたのであった。

二 章

さて、森羅万象全ての事物が、原因と結果で成立
するように、我々の変身にもまた原因が存在した。

それは、友人ハヤカワなる人物が、イトーヨーカドー
橋本店にて、宇宙人マスクを賣うことに始る。それ

は、その前日に2人で練った冗談の計画の、実行第
一段であった。店のマスク全てを賣い占めたことは、
言うまでもない。そして、我々は、友人ローマを誘
い、友人ニヘーの家に行ったが、ニヘーは旅行中と
かで不在であった。彼は惜しくも、4号とは成り得
なかったのである。非常に残念なこととした。

我々は、この銀色宇宙人をギンちゃんと呼び、そ
れを略して、G1、G2、G3とした。そして我々は、
計画の第2段階へと進んだ。

2段階とは、日曜の昼に、マスクをして車に乗
り、町田の街行く人の反応を見ることであつた。

ある者は驚き身を凍め、ある者はあきにとられ、
ある者は手を振り、ある者は見て見ぬふりをした。
中でも、一人のキチガイには、こちらが気味が悪く
なつた。「ヨロ／＼ヨロ／＼と手を上げ、近づいてく
るその目は、まさしくキチガイの目であつた。

三 章

読者諸氏が、こいつはおもしろそうだ、ぼくもナ
ンと買に行こうなどと思つても、もうイトーヨー
カドー橋本店にはないということは、前述の通りで
ある。なにしろ、飾つてある見本まで賣つてきたの
だから、ちなみに商品名は、ウイユージニアである。

四 章

計画の第3段階というのが、この金曜の夜のこと
である。それは、おまわりの検問に引かかること

であった。G1・G2の2快人は、目的をとげるため、津久井湖周辺をうろついたが、つかまえてくれという日に限って、相手がいらないというのは、世の中、うまくできていないものである。つかまえられて、キチガイとまちかえられて、趣味は？とか、この色何色？とかいった質問を全てテープに録りたかったのだ。相手がいらないのでは話にならないので、急遽、第4段階に移った。それは、以前から我々が行っていたインターセプターのこと、マスクドでやることであった。インター……とは、主に族を対象に行うカーチェイスである。2号は先程よりうかれて、「男はやっぱリハードボイルド／ハードボイルドと言えどカーチェイスよ／なあG1・ガハハハ。」と、めめきちらしており、日常では、一般市民ズラを二いているこの男が、このように急変するといふことは、まさに変身を通り越した急変である。

第一の獲物は、安全運転を続ける我々を追い越した。明治TAXであった。獲物にとって不足はない。我々は、ルームミラーを覗き、我々の容姿に見アグススピードを上げるTAXの後にヒツタリとついた。気づいた時には、橋本五又路から、陽光台にまで来ていた。そこで降りた容の顔は傑作であった。道路を横断するその顔は、こちらに釘つけて、手と足を一緒に出していた。

五章

帰路、なかなかこちらを見てくれない他車にしろ、りながら、何台めかに追いついた車の後にゼツタリとついて行こうとしたが、その車からナンバーのヤー様であることに気づき車線変更した。

今度は、こちらに気付いて笑いなから抜いていった若いカップルの赤いファミリーアである。

「笑顔で抜いていったってことは、ついてきて下

さいつてことじゃん。インターセプター発進ノ。」
と言うよりも早く加速していた。

再び五又路に戻り、そのままハエウ方面に向う。
機体ナニバーである。女のその方が、時折こちらと
振り返るのが分る。彼らも追跡されていることを
感づいたらしい。信号で我々は、手話のようにミエ
スチャーをする。増々気味が悪い。それも何度も繰
返す。我々はそれが宇宙人の会話と信じている。

と、突然機体は脇道に逸れた。当然我々も後を追
う。これで、自分の立場というものが、どうである
か、彼らにも十分理解されたはずであらう。

彼らのスピードは、増々上昇する。彼らの焦りと
不安が手にとるようにわかる。無理な追い越しをす
る。我々もそれに続く。女のその、こちらを向きつ
ぱなして、隣りの後をつついて何かを言っている。
しかし顔の表状まではつかめない。彼らもまた、果

しんでいるのか、それとも恐怖に戦き、あの時の突
顔を悔んでいるのであろうか。彼等には、すでに、
自分達が、インターセプターに追い詰められた、あ
われな機体になすまいという事実のみが存在を許さ
れた。唯一の法則である。しかしその彼等も、この
インターセプターの中に、よもや、トウーカッター
と、サナイトライダーが乗りこんでいるとは気付か
ないであらう。

その時、前対向車線に検問をやっているのか認
識できた。我々は再び、作戦に移った。もうすで
に彼等は十分反省しているに違いない。これから、
全うな道を歩むであらうことを、私は確信する。何
故そう言えるのかと聞かれても、答えようがないが、
私は、彼等を追いつめるうちに、彼等という人間が
解ってきたのだ。彼等はそういうやつらだ。

私は喜んで彼等を逃がしてやろう。

六章

我々は固より、安全運転面では、非の打ち所が無い程に徹底している。厭味たらしく、シートベルトもさちへと締めている。警官に止められても、交差点と疑われるだけである。運がよければ楽しいティーアが録れるのである。

我々は、Uターンをし、ゆっくりと彼等の前を通った。夜中であるというのに、実にありがたいことである。彼等のおかげで、我々市民が安らかに眠れることを忘れてはいけないうら。

彼等は、じつとこちらを見ただけで、止めることもなく、すぐに、行けのサインを出した。意味不明である。

我々は、気付けたまましはらく走り、若さ故の迷いの為に獲り逃がしてしまった獲物の重大さに気付いた。彼等は、やはり逃がすべくではなかった。

彼等を信じた自分か愚かであった。彼等は、再びどこかで、我々の様な異星人を、迫害し続けるに違いない。そうさ、やつらはそういう人間だ。

我々は、それぞれの懐りを胸に、静かにマスクを取った。そしてその瞬間に、一市民に戻った。

「いやちゃんおもしろかったね。」

「うんくセになっちゃいそうだね。」

エピローグ

この後、プロジェクトは、ちいさく続く予定である。では、マスクでオートバイというのを考えている。構想に構想を練ったシューワースが、また今度が最後のヤマトの如くか、とりあえず、続けて行こうと考えている。

僕のよいハードボイルドは、あたかもかたやで卵をかんたかめのような、当用漢字外漢字でも味あえる。

丹沢の山とランニング

悪原義範

このところ、OB会にはほとんど顔を出さずにいるが、まがりなりにもOB会員ということにしてもらうと、私たちのOB会員にとり、丹沢の山々というものは、とりわけ親しい出陣の存在であらう。

山とは縁が薄くなつた今でさえ、丹沢の山々は、私たちの目の前に、どんな時をすえて、それゆえか、うれしにつけ、悲しいにつけ、私の目はその山容をとらえるのである。

高校時代の悪癖がぬけぬのか、私は今でもよく走る。コースは、田名中を出て、すぐ裏のジヤングコースに入る。上溝南高

校の所で右に折れ、塩田という村に出て、そこからさびしい田んぼの一本道を田名中におくけて帰る。約6kmのコースである。

桑畑の上や、冬移れ田んぼの何こうに、丹沢の山々はいつもその大きな山々連なりをみせてくれる。山を見ながら走ると、不思議なことに、自分か走っていることを忘れてしまふ。走る感じがなくて走れるという実に爽快な気分。

悪癖が高じて、昨年あたりからマラソン大会、駅伝大会に参加している。今のところ、その大会会場がいずれも丹沢を見わたせるところにあつたためか、我ながら満足のゆく成績を残せたり。丹沢の山とランニング、ひょんな組合せかもしれないが、OB会員、いや、元ワンゲル部員にとり、一種の郷愁を誘ふものである。

涸沢は飲み頃サインで 待っていた。

——五月合宿報告——「二瓶 祥」——

5月1日、八王子に19:30集合した者は江成さん、秋山さん、小沢さんと私の5人であった。当初の計画では斎藤さんやリーガーとして加わる予定であったが、仕事の都合上不参加となった。さらに、出発予定日より1日ずらしたという事に、今回の山行の成功要因はあるのであった。

特急などというリッチな車両に乗り込み、ワインの栓をギリギリと開けるゆーがは出発であった。松本駅に着いてシエラフカバーを出して仮眠にフくと、一人の女性が穂高へはどう行けば良いか、と尋ねてきた。

「主人が穂高へ行くと突然出て行ってしまったの

ですが。」

「数回入山者の中から深すのはきつ、と無理というものでしょう。」

江成さんはいくつかの可能性のあるルートを見せ、また、結局は無理なと言った。女性は丁寧に礼を述べると去って行った。

「今のは何だ、たんですかね。」

「ユーレイじゃねえのか。」

そのまま何とか寝て、翌朝もほふる雨の中を夕方に上高地へと向った。上高地に着いて登山者カイドも届け、出発する頃は雨が上り始めた。少し歩いてから、遭難者の捜索願いのチラシを受け取った。願書裏入りの紙面には、冬に穂高方面へ入ったまま不明の登山者について記されていた。

「江成さん、そのうの人は……。」

「やっぱりお前はユーレイだぜ。」

途中、さるの群れやかえるの集団登壇の現場などを見ながら横沢へ到着。バスコを各自一箱づつ食べる。秋山さんは買い出しの時から異常にバスコに執着するのだった。

横尾で大休止の後、瀬沢を目指し強い日射しの中を進む。やがて谷沿いに雪の上を歩く。たまたました傾斜を登り、雪の照り返しに目をくらませながらも、瀬沢のテント団地が見える所で風に吹かれながら小休止。最後のひと踏んぱりで着いたときは、ビールビールの嵐であった。とりあえず、ザッリまうちゃって、そのビールを買ってカンバイした。『もてではぶくろうさん。カンバイ!! ゴビゴビ。』
『なかなかいいな景色だぞぶ。』
秋山さんは、
『ンゲンゴ、ゴビゴビ。』であった。
さて、ここで問題なのは小沢さんである。

小沢さんは松本駅のトイレで幸か不幸か、中身に手をついていないビールを拾ってしまったのである。

『おけた跡はないからグイッ、ウでたろ。』

『ミッ!!』 『ンゲンゴ……別に何ともないぜ。』

しかし、一時間後、小沢さんは異常な起った。たまたま、おにゅうのエアテッリス・シャットを着こみ、ウスラでかいエアマットのの上にグウンしてしま、たのだ。

『やッば、ひろ、たものな人が飲むもんじゃねえな。』

江成さんは恐しくにあわないほど、教訓的なセリフを吐くのだった。

翌朝、重々となつた良い天気だ。た。トイレが混人たため、出発が少し遅れたがアイゼンを着け出発。ガイテンのリリースした斜面を軽快にステッパを刻む。約2時間後、白出乗越に到着。ここで固った。

とに江成さんは突然ニッカをすりおろし、コーギー
しいパンツを五月のさわやかな服にさすのであつ
た。小沢さんの

「女の人か後ろにいると甲のの何とゆーことさ
とモラルの権化のようになせりてを言うと、

「グイショウでたよるめはなまてい本ば。」

「何でもなまてい本ですか?。」

「ろめはなまてい本は、パンツなんてわかりやし
ないぜ。」

「ハア?。そうですか?。」

私は個人的にこれを「江成さんろめ説」と名付け
た。30分休んで奥練の頂上へとハシゴを登る。リサ
リサを通過し、もう少しで頂上という所で又しても
江成さんはカッやりしてしまふのだ。た。

「キョウ、キョウットタンマ足が足が?。」

今度は何だろうと、釈山さんはすでにタバコに火を

つけ、冷やかに静観していた。

江成さんはおもむきにニッカをまわし、左へとさ
し指を空に伸ばすと右手に握ったサロメキールをム
ニユ!!としほり出した。ショリショリゴシゴシとフ
トモモにぬりたくると、ニッカをすり上げ、ヒート
一言。た。

小沢さんは少しはなまて、我関せずとい、た態度
を取っていた。歩き出して小沢さんが、

「江成さん!! 前を歩いて下さい。サロメキール
のニオイかニオイか?。」ともんどううった。

頂上に着き、槍から上高地までバノラマを見なが
ら、小休止。前練に向うと雪はなくなり、最低鞍部
でアイカンまはすしアタック。頂上には正午ちょ、と
遅れ到着。小沢さんは念願の四ノリに立ててうれし
そうだった。ボクは又また道をまぐる事にうとまし
さを感じた。た。奥練をめぐし、たうたうと

帰路に着くと日は傾まかっていた。

奥纜を通過するとき、ニヶ所ばかりアイゼンをつけた。ジャンはもう夕闇の中へ半分埋まっていた。白出乗越でアイゼンはずし、涸沢へとすべるように下る。16:00に着。ビールを飲み終え、食事を作る。している所に、ヤーサンみたいな増田さんと小宮さんがマスダキッリなにむやかさでやってきた。増田さんはパノラマコースで調子が悪く吐いてしまったという。5月4日、起ると今日もいい天気だ。増田・小宮両氏は北纜へ出発。江成・小沢両名は5人のコルへと向い、ボクと秋山さんはテントでシェラフを干し、昼寝をした。昼過ぎ小沢・江成両名が帰ってきた。1400よりの相山協の式典へと横尾へ急いで下り、すべり込みで闇に合った。長い長いセシモニーの後、よりやくおでんなどの開祭となり、ビールがびびり世界にまたもやなったのだった。

ビール片手に、夕日に照らされる山々を眺めながら、今回もなかなかだ。たと、一人満足げにうなづきながら日は暮れて行くのだった。



星と雪の間に

祥

星は硬い光を地上に投げ

仏とみは闇の中でそそ木を受け

ここは空に近いかだけ星の数が多い所

空に近いかだけ流木屋の尾が長い所

テントの中の暮は

明日の太陽と風

何のてらいもなくピリリと目指す

明日町へおりました

星の数は減り

流木屋は見えない

星が一つ流木たゞ

僕はテントの中の夢へまぐり込む

北海道一九八三夏

夏の北海道。最悪の季節だと他人は言う。何を好んで人ごみの中へ出かけるのかと。確かにあの「知床旅情」以後北海道の観光開発は一層進み、都会の喧噪が、かつて「秘境」と呼ばれた土地にも入り込んできていることは事実であろう。既に十数年も前、山報第二号でH氏は「あの馬鹿さわざがあるがざり北海道には決して行かない」と記している。しかし我々は敢て出かけた。今時の日本、何処へ行っても人のいない所など無いのではないが、夏の北アルプス然り、又南アルプス然り。一日歩いて人に会わない所など余程のコース以外ほとんどない。「北海道探険記」に引られる昭和三十年代までの北海道を求めるときはできないだろうが、かつての「北海道らしさ」や「秘境」の名残をどこに探している所もあるのではないが、否人の集まる北海道も又現実の姿である。それを肌で感ずるのもいいではないか。など勝手な事を考えて計画を実行に移した。

〔北の大地〕

八月二日午後五時三十分、上野駅十三番線ホームは北へ向う多くの人々で賑わっていた。飛行機を使えばわずか一時間半ばかりのところを我々（倉地・平田・中川）は二十時間以上かけて行くのである。国鉄も我々の様な客ばかりならば赤字に悩むこともないだろうが、暫くして青森行多行「八甲田」が入線、要領の悪い駅員に誘導され乗車口に進む。ドアが開くと同時に皆一斉になだれ込む。ザックがつかえてモタモタするが、平田が素早く座席を確保し、まずは第一関門突破。車内は大きなザックを持った若者達や、一足早い帰省客らしい家族づれ等で満員である。それぞれが荷物を整理し、腰を落ち着ける頃「ガッタン」という大きなシヨックと共に列車は動きだした。私は早速缶ビールを開け、平田、中川の用意してくれた

おにぎりをばくつき夕食をとる。賑やかだった車内も郡山を過ぎる頃には静かになる。床に新聞紙を敷いて横になつている人もいる。中川もその一人で他の乗客に顔を蹴飛ばされそうになりながらも、望々と大きながうだを横たえている。平田は小柄ながらだを一層小さくしてシートにうずくまつて寝ている。

八月三日、列車が浅草を過ぎる頃連絡船の乗船名簿が配られた。午前六時十五分青森着。どんよりとした空である。北海道側の空文様が気にかかる。乗船まで待合室にて休憩。

七時三十分「八甲田丸」はドラを打ちならし、螢の光に送られ、ゆつくりと岸壁を離れた。甲板ではマリンガールと呼ばれる美少女数名が、案内やら記念写真にと乗客にサービスをしている。私はそれを横目でみながら「マウンテンガール」と写真におさまる。船室に戻り、昨晚の寝不足をとりもどす。波静かな津軽海峡であった。

約四時間後、函館に入港。相変らずの曇天。沿岸と同時に皆一目散に函館本線のホームへ駆けこ行く。我々も後に続くが、特急「おおとり」・「北海三号」とも既に満席。ようやく「おおとり」の通路に座り込むと間もなく登車のベルが鳴る。

遙々と北海道へやってきたなどという感傷に浸っている暇もない程の慌ただしさであった。



「札幌」

午後四時頃札幌

着。少し早いが午後十時十五分発の網走行急行「大雪五号」の乗車口にガックと並べておく。勿論銭だけである。年配の駅員さんが「今から待つのか」と呆顔で見ている。食糧の買出しと夕食のため早速街へ繰り出す。さすが百万都市、北の都と呼ぶにふさわしい街並である。時計台と型通り記念撮影、大通り公園から二条市場へ足を延ばす。二条市場には美味そうな物が沢山並んでいたが何も買わず、結局長崎屋の地下で食料品を煮る。テレビ塔に寄り、訃つこきた荷物を義弟に渡す。この間平田と中川はとうとうこの焼けるにおいに勝てず、無心にばくついていた。夕食は「いろは」……「へ、合宿の成功を願ってまずは乾杯。知床の麓に抗できる体力をつけるため、次から次へと注文。片端から平上げる。店を出るとビル街には色とりどりのネオンが瞬いている。〇〇はその一つ一つを大声で読み上げながら気持ち良さそうに歩いている。私は少し離れて他人を惹いて歩く。

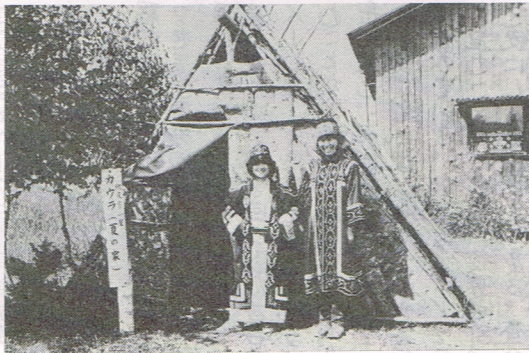
「知床へ」

遠軽を過ぎる頃夜が明ける。空は雲一つなく長く晴れている。途中から乗り込んだ陸送屋？のお兄さんに北海道の山や人情等色々な話を聞かせてもらう。平田の登山靴を見て氏曰く、「北海道の山には、そんな靴はいらない。運動靴で十分だ」と。自分と中川は地下足袋を登るつもりだとすると、「ウン、それが一番いい」と。事実、知床をはじめ、大雪・雨竜沼と地下足袋は快適であった。



午前七時過ぎ網走着。待合室で朝食をとった後、平田が手に入れさせたパンフレットを参考に市内観光。ジャックカドフ二（北方に居住していた少数民族の資料館）、網走刑務所、モヨロ貝塚、オホーツク海岸等を巡る。途中の道端で枝もたわわに実をつけたサクランボウをみつけた娘二人は必死で実を落し、さかんに口に詰め込んでいる。登すき音をつかいた木造客車で原生花園の中を斜里へ向う。やがて右前方に、ひとさや高くそびえる斜里岳の姿を望むことができた。斜里からは海岸沿いにウトロへ。バスはじやがいも畑の中をひた走る。一時間余りでウトロ温泉到着。

かつての秘境知床の一方の玄関ウトロは温泉旅館が町の高台にまで建てられ道の両側にはみやげ物屋が所狭しと並んでいる。聞かされた「税関」ぶりである。キャンプ場は高台の林の中にある。網走でもとうとうあるが、やたらとガラスが多い。ヒッチコックの鳥を思い出して無気味である。家族づれや、各地から集まってきた若者達で賑わう中に、小宮氏のダンロップ TENT を張る。設置後と



そろそろ涼しくなった風を求めて町へ出る。グランドホテルで風呂だけ使わせてくれるとのこと。出かけるが時間が合わず後刻出直すことにしてテントへ戻る。夕食は豚汁。（ミニの炊事場で平田がまな板とスポンジを拾ってきた。食事後再びホテルへ。料金三百五十円はちょっと高いが久しぶりの汗を流す。入浴後ロビーで二人を待つが長湯とみて先に帰る。途中買求めたビールを飲みながら待つが依然帰る気配がない。夜道は暗い。様子を窺いに出かけたところ大声で話した

がら坂を登つてくる二人に出会う。心配無用。(またもや平田がホテルでトイレットペーパーを拾ってきた。)

〔知床縦走〕

八月五日・カッコウならぬカラスの鳴声で起床。ピタリ四時。六日に再びウトロに戻るため、不用な荷物を管理人さんに預けて出発。バス停の向い側では子供達が集まっ、こらジョイ体操が始まった。代々も身体をほぐす。バスで岩尾別温泉へ向う。ここには唯一のホテル。その名も「地の涯」があるが、独占ゆえがフロントは無後援。ホテルの裏手木下小屋の脇で入林道(北海道の山では、営林署へ入林届を提出することになつてゐる)を出して、いよいよ知床への第一歩を踏み出した。いきなり急な登りが続く。相模原を立つてから四日目にして漸く山にとりついた為か、身体が言うことをきかない感じである。トップの中川は快調な足どりで登つて行く。ひとしきり汗をかいた後約三十分でオホーツク展望台に飛び出した。眼下に広がるオホーツク海の青さに感激する。しばし休憩の後出発の声をあげる。



「が娘二人はその気なし。展望を案しむ二人の白い目ざけい。道はおも急登がづく。途中の弥三吉木の冷たい水でのどを潤す。さらに一登りで道はようやくゆるやかになる。極楽平である。しかし極楽平とは名ばかり、西側から覆い被さるヤブの中に霧の息づかいを感じ、わき目もふらず一氣に通過、距離をかせぐ。道が沢すじにかかると頃からしだいにお花畑が広がってくる。エゾコザクラ、アオノツガザクラ、エゾツカザクラ、チンゲルマ等々、素晴らしい群落である。

こうなるとペースダウンは必至。心ゆくまで花を楽しむ。色とりどりの高山植物。緑のハイマツと青い空、白く輝く雪渓、そしてここまでも青く広がるオホーツクの海。

お花畑の中を登りつくとそこはハイマツの広がる羅臼平。右手に羅臼岳のドーム。左手には三ツ峰の特異な姿がそびえている。ザックを置き空身で羅臼岳に登る。ハイマツと岩の間を縫うようにして頂上をめざす。高度を上げるにつれ国後島の姿が浮び上ってくる。頂上直下の岩場を回り込んで合宿最初のピークに立つ。一六六〇メートル、知床の最高峰である。頂上からは三六〇度の展望を楽しむことができた。南には羅臼湖を見おろし、その先に海列岳、斜里岳を望む。東には羅臼の港、そして国後島、さらに遠く千島列島が見える。北にはこれから越えて行く三ツ峰から硫黄山に連なる山々が伸びている。西にはオホーツク海、知床五湖、そしてウトロの港を望むことが出来る。後髪を引かれる思いで風の強まってきた頂上を後にして羅臼平まで戻る。昼食の残りをとったあとはいよいよ縦走開始。緑濃いお花畑の中を快調に登る。ほどなくして三ツ峰のコブの間に登りつく。周辺は一面の草原で、高度一五〇〇メートル前後の山とは思えない高山の雰囲気を感じさせる。三ツ峰とサシルイ岳のコルは、きれいな水の流れる快適な露营地。はじめはここ泊まる予定であったが翌日の行動を考えると、もう少し先へ進むことにした。サシルイ岳の斜面に登るにつれ、三ツ峰のコブの間から羅臼岳のドームが頭をのぞかせる。頂上からはオッカバケ岳とのコルに



ある小さな池がさうさうとたっているのが見える。コルへ下る沢すじには雪溪が白く輝いている。そこを米粒のような人影がこちらへ登ってくる。ほどなくして出合ふと地元の熟年グループであった。羅臼平から硫黄山まで往復して来たのだという。我々がこれから目指す硫黄山は、まだ遙か彼方である。雪溪をすべり（地下足袋はやたら足が冷える）羅の出さうなハイマツのやぶをくぐりコルへ向う。コルの手前でコマクサの見事な群落をみる。先ほど上から見た池は濁った水たまりという感じである。ここは指定地ではないが時間と疲労を考え葛巻することにした。しかし一面お花畑でどこに張つたら良いか困ってしまふ。花の味な所をえらんで張ろうとしたら、ここで平田の一声「そこはダメ！」花を受するものはつらい。結局やや傾斜はあるが、登山道の少し広がっている所に張ることになった。ここには先客が一人おり、岩陰のいい所を占領していた。池の木は飲用に適さないため先刻通過してきた雪溪からの流水まで汲みに行くが、一人になると今にも罷が出さうな気がする。（羅の通り道は主に沢すじであるという）羅よけの歌をうたいながら足早に戻る。わずかな距離であるが緊張する。食事後後線まで登り北の海に次む夕陽をながめる。燃えるような夕陽が水平線に近づくにつれオホーツク海に一本のオレンジ色の光が走る。冷気が漂う中じつと佇む。壮麗な一時である。辺りが闇につままれる頃シユラフにもぐり込む。夜中時々目がとめる。外はガスが出ているようだ。

八月六日、昨夜からのガスが白く辺りをおおっている。予定よりやや遅れて出発。朝霧の中をオッカバケ岳に登りつく頃には青空もののどきはじめた。振り向けば、羅臼岳、ミツ峰が青い空をバックに飛びかうガスの中かうその姿を見せている。オッカバケ岳を下りきるとニッ池である。池のほとりには、霧にぬれたチングルマの白いワタ毛が朝の光に輝いている。聞くとここによると、今回のコースの中ではこのニッ池から硫黄山までの間が羅の出没が最も救しいという。平田は銀、中川はコップとカウピナの即製カウ（ベア）バ

ル、私はラジオと三者三様の音をたてて背丈を越す深いハイマツの中を一步一步進む。ところどころにハイマツの束のかじられた跡がみられる。それも比較的新しいようだ。明らかに近い最近羅がこの辺を通ったのである。今もハイマツの中から我々が通り過ぎるのをじつと窺っているのかもしれない。尤も三人でこれだけの音をたてていれば羅の方が怖がって逃げこくれるだろう。何といつても平田、中川の掛け合い漫才と熊よけの歌は相当なものだ。羅ならずとも……。悪戦苦闘の末ようやく南岳の頂に出る。腰をおろし、しばし休憩。あたりには人影はない。本当に静かな山である。正に秘境である。登山道は踏み跡程度のところもあり、道標も極端に少ない。山頂と分岐に最少限設置されているだけで、それも何も記されていない木の棒が一本立っているのみである。うっかりしていると、とんでもない所に出てしまう。今回は天候に恵まれたが、ガスにまかれた時には充分な注意が必要である。



南岳を出発、オホーツク海から吹き上げてくる風がしだいに強まってきた。細かい砂が飛ばされてくる。時折突風で身体が倒されそうになる。道は太平洋側に回り込みやうと風が弱まる。水の涸れた湿原状の原をいくつも横切り再び主稜線に登り返すと知内別岳の東の肩である。眼前には今までの緑が一変して赤茶けた荒涼たる山肌が広がってくる。相変らず強い風に乗って硫黄の臭いもただよっている。特異な姿を見せる岩塔の間を縫うようにして、崩れやすい斜面の登降を繰り返す。風を避け短い昼食をとった後、最後のピーク硫黄



山に向う。道は一担噴火口へ下り、改めてはつきりしない砂礫の斜面を登る。午前十一時ようやく頂に立つ。遙か南には昨日登った羅臼岳、そして三ツ峰、サシルイ岳、麗の影に緊張した南岳のハイマツ帯、さらに北へ知床岳、知床岬へと続く緑の脊梁山脈。足元には青いオホーツク海が、カムイワツカ川により緑色に変色しているのがはつきりとわかる。苦しい登行が報われるひと時である。充分すぎる程度を楽しんだ後、再びザックを背に荒れた山肌を下る。おとはひたすら知床林道を目指して下り続けるのみ。新噴火口から噴き出す白いガスを見る頃、左手下方に湯煙をあげながら流れるカムイワツカ川を見下ろすことができる。時間があれば天然の湯舟で一風呂浴びられるのだが、林道まではあと一息。

カムイワツカの出合いにはバイクや車が所狭しと並び、トイレまでつくられている。岩肌を滑るように流れる川には、多くの人々が思い思いに遊んでいる。あまりの賑やかさに盛然とする。バスの絶車まで一時間経ったので、場の流れを途中でさかのぼり、足を荒れにひたす。上流に向うほど流れは熱くなる。娘二人は初め足だけつけて遊んでいたが、そのうちあきたらず、ランパン姿になり流れの中に入ってしまった。多くの観光客と共に五湖経由でウトロへ戻る。

新鮮な食糧を購入し再びキャンプ場へ。例により食糧風呂へ、ビールを飲み二人を待たせ今夜はお遅い。ウトウトする頃戻ってきた。明日は移動日という気楽さで夜遅くまで話し込む。

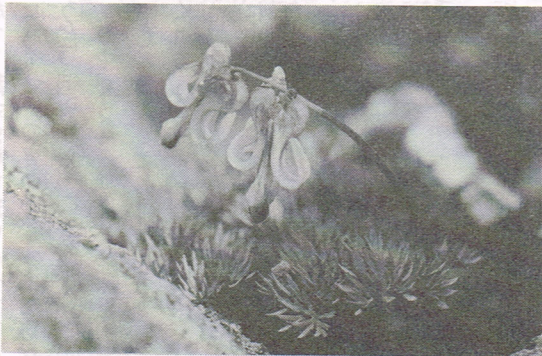
〔層雲峡へ〕

八月七日、今日は移動日、朝はのんびりといきたいが、早起きのクラスがうるさくて朝寝もできない。ウトロから斜里・網走・上川・層雲峡へとバス、列車、バスと乗り次ぎ午後五時頃国設キャンプ場に着く。層雲峡温泉は北海道を代表する観光地。各地から大型のバスで多くの人々が集まって来ている。折しも町の広場では子供達の花火大会がおこなわれ夜遅くまで賑やかであった。

〔表大雪縦走〕

八月八日、今日から第二の目標表大雪の縦走である。前日願っていたタフシーに乗り込み、赤岳登山口（銀泉台）へ。朝ちやの約四十分で到着。入林道を出し、早速登り始める。知床とちがい、荷物を全部かついでいる為、ザックが肩にずりりとくい込む。しかし道はちきやすく、第一花苑、第二花苑と花を楽しみながら登れば、ザックの重さも忘れることができる。沢も横切る地点やハイマツ帯では知床同様驚きかけの笛を吹きながら進む。へ少し南側の高原石一帯は麗の出没が激しく入山禁止になっていた。第二花苑を過ぎ、荒れた岩の台地に登りつくと駒草平である。岩の間の砂礫地には一面にコマクサが咲き乱れている。

これだけの群落は今まで、見たことがない。さすが大雪、スケールがちがうと大いに感心する。この他、赤岳から小泉岳にかけて、イワアワロ、クモマユキノシタ、タカネスミレ、イワウメ、エゾツガザクラ、イワヒゲ、ホンバイワベンケイ、ヨツバシオガマ、チンゲ





ルマ、ホンバウルツプソウ、ミヤマサワアザミ等々。(花の名前は平田の鑑定による)花また花である。そして大雪の特徴は一つ一つの花が、それぞれ大きな群落をつくっていることである。

赤岳は平地に岩の塊が飛び出し、こいるような頂、小泉岳はどこが頂上かわからないほど、なだうかな山であつた。時折ガスが流れる中、白雲谷で昼食をとる。先を急ぐ為白雲谷の往復は省略。(後でナキウサギの多い所と聞き残念)どこまでも広いそして人静かな北海平を抜け、御鉢平を取り囲む連

峰の一角北海岳に立つ。この辺り、本州の山には見られない素晴らしい山さを持つている。御鉢平の底、その名も有湯温泉から噴き出す独特の臭いのガスが風に乘つて吹き上げてくる。間宮岳を下る頃よりガスが濃くなり、風が強まってきた。裏旭のキャンプ地には既に多くのテントが張られていた。

夜半かつ風雨が強まり、夜明け前には猛烈なカミナリとなつた。稲妻により一瞬テント内が昼間のように明るくなり、即頭上で「ドカーン」と雷鳴が轟く。全く生きた心地がしない。

八月九日、夜明けとともに雨はやむが相変わらず濃いガスがあたりを包んでいる。天候の回復が見込めないため、前夜検討していた旭岳温泉に下ることにする。再び降り出した雨の中、新品のゴアの雨具を身につけ旭岳の登りにかかる。この登りはやたらと急で、火山性の砂礫の歩きにくい道である。前日までの展望や、花もない单调な登りであつた。一時間程で旭岳頂上(二二九〇メートル)北海道

の最高峰であるが、あまり感動もなく早々に下山にかかる。このあたりは、ロープウェイで登ってくる人も多く、軽装の人が目立つ。一向に晴れる気配の見えないガスの中をひたすら下る。姿見の池もガスの中、休む間もなく一気にロープウェイ駅へ、そのままロープウェイに乗り込み旭岳温泉へ降りてしまった。少し軟弱すぎたかひと人で反省。雨も上がり霽日もさしてきた。バスを待つ間駐車場と野菜のたまり入り込んだラーメンを作っている。車で行ってきた人が珍しそうにじつと見ていたが、そのせいかキーを付けたままドアをロックしてしまい、駅の人に針金で開けてもらった。

〔旭川〕

バスで旭川へ出るが、問題は今夜の宿。考えていたキャンプ場は手続きが面倒、YHは時間的に遅い、身体を疲れしており考えるのも面倒臭くなり、皆人まかせ。一泊千五百円の看板を見つけ様子を現に行くが、かいこ構式の簡易宿泊所、女の子にはさうつと無理結局ビジネスホテルに泊まることにする。ここ二人の注文「でさるだけ駅に近く、きれいで、安く、風呂付き」にしとくれという。そんなところあるものかと思いたが、案内所へ出かけて交渉、徒歩五分、きれいかどうかは知らないが、ツイン一室四千円風呂付き、シングル三千六百円風呂なしでまとのる。早速室へ入りひと眠り。夕食は街に出ることとする。一休みして元見一杯の平田の案内で目星をつけた店(ユーカー)に入る。それぞれ大ジョッキ、中ジョッキ、水割でまずは乾杯。次から次へと注文、今までの栄養不足を一気に補う。一杯入った中川は例によって陽気になり寧ろはにぎやかに。また明日から暑寒別が待つている。

〔雨竜沼〕

八月十日、旭川より竜川へ。竜川は思ったより大きな街で「スズランシティー」と銘打った歩行者天国があり、人通りも多い。大雪の失敗を生かして食糧を大量に買込む。米屋で「コシヒカリ」を一二キロ買う。愛想のいい旦那さんと、中川と話しが合い、彼女は

端敷をおまけしてくれると思ったようだが、しつかりとられていた。歩行者天国で食後のデザートを食べ、優雅な時をすごす。

竜川駅より国鉄バスにて暑寒別岳登山口の雨竜町へ行く。バス停前の商工会館で入林手続をすませる。暑寒別岳の中腹に広がる雨竜沼湿原は「北海道の尾瀬」というキャッチフレーズで町をかなり力を入れており、絵葉書や茶をサーブしてくる。雨竜町より登山基地になっている雨暑寒荘へ向うが、この時乗ったタクシール途中でガス欠。運転手はひきつったような苦笑をこいていた。何とか終点までたどりついたが、帰りには小屋からガソリンを分けてもらい帰って行った。雨暑寒荘は町営の小屋でかなりの人数が宿泊できている。内部は三階まであり、トイレ、洗面所、大きなストーブもついているきれいな小屋である。使用料は無料、小屋の前にはキャンプ場と炊事場、駐車場もある。いかに町が力を入れていたかがわかる。利用者も多く、キャンプ場は中学生の団体で大層賑わっている。雲が低くたれこめ、天候はおもしろくないが明日はどうか。外でオー

クダンスに興ずる中学生の声を聞きながら横になる。

八月十一日、この日は夏越しこしまいで起こされるまで横になっていた。雲はまだ低い。出発が遅れたが、とりあえず雨竜沼まで登ってみる。ペンケパタン（上手にある川の意）におつて登る。しばらくして右下に白竜の滝を見る。

トップの平田は快調に登るが、やがてガスが濃くなり雨も降りはじめた。道のわきに何やら動物のフンなどもころがっている。平田の「帰ろうよ」の連呼、中川との



霰よけの歌の合唱が始まった。登りついた湿原は静寂そのもの。乳白色のガスの中に水滴にぬれたアヤメやアザミが遠くまで咲いている。池塘にはオセコウホネの黄色い花もみられ、ガスに包まれこはいるものの、湿原の美しさの一端を見ることができた。雨も強まってきたのが暑寒別岳は断念。湿原を一周して早々に下ることにする。先に登ってきた小学生や中学生の団体を文字とおり飛ぶように追い越して下る。ここには、私と中川が履いていた地下足袋が子供の注目を集めていた。子供「かっこいい靴だね、あれ何？」母親「あれなら家にもあるのよ」。それにしても雨具も持たず、夏とはいえ、ぬれながら歩いている人が多く怖いようだ。途中白竜の滝に寄り、一気に雨暑寒荘へ下る。もう一泊することになったが、「今日中に下山しよう」の声を教えた小屋の管理人にタクシールを呼んでもらう。とうとうこしなどゆでこしのんびり昼食をとっていると、タクシールが上ってきた。昨日のガス欠の運転手がニコニコしながら「こんないい天気は何ぞ登らんの」と声をかけてきた。

「上はひどい雨だ」と答え、管理人と運転手にとうとうこしをふるまう。「トカーンとのんびり雨竜沼」の大看板の前で記念写真を撮り雨暑寒荘を後にする。

〔番外編・瀬白〕

タクシールは軽快に山道を飛ばす。ガソリンは満タン、対抗車かまったくないのでビュンビュン飛ばす。この勢いで雨竜町を一気に走り抜け、またたく間に新十津川駅に着く。二日間世話になった運転手ともここで別れる。今日はここから丸沼線で三十分ばかり南へ行った

浦白の友人宅を訪ねる予定である。二人はいままでも駅に着く度にスタンプを集めていたが、この駅には特別に用意していないとのこと。駅長さんの印を押してもらった。あうがひめ電話していただいたので、浦白駅には後藤氏が、お兄さんと共に車で迎えに来てくれた。降り出した雨の中を、車で後藤氏の家へ向う。一日は中川ドライバー。後藤氏の所には、夏休みということと、甥や姪が多数遊びに来ており、大層にぎやかであった。一服後中川の運転でラドン温泉へ行き、旅のアカを落とす。帰りには涼みがてら、石狩川沿いに広がる田園地帯をドライブする。この辺り一帯には、石狩川の蛇行によってつくられた「三日月湖」が多くみられる。夕食は大さなグレイジの中で、ジンギスカン鍋。ビール・日本酒・焼酎・特製浦白ワイン・自家製いスカッア酒……。アルコールづけになりながらマトンをつつく。やがて、いい気持になった中川は子供の手をとりおどりを始める……。大地蔵の話なども飛び出し、にぎやかな亭は席を居間に移してなお続く。

八月十二日、年のせい、朝早く目が覚める。(実は当地の農家は雨戸がないので、日が昇ると自然に目が覚める。朝のさわやかな空気を、少しアルコールで汚しながら散歩に出る。堤防に登り西方をながめれば、樺戸山地が育ちまわっている。朝食後、後藤氏のお父さんの運転で、山の畑へじやがいも掘りに出かける。適当な所を次々と掘りおこす。平田は初めてだといって夢中になっている。またたく間に大きなカゴ一杯になる。さっそく御馳走になる。ゆづだいも



にバターをたっぷりつけて食べる。だらふく食べこ一休み。

八月十三日、キタキツネの巣があるということを知り、石狩川の河川敷へ出かける。かつては米をつくっていたのだが、減反政策の為に牧草地となつてこの所である。生憎キツネを見ることはできなかったが、牧草地のんびりと遊び、のどかな時を過ごした。

昼過ぎ、お世話になった御家族の皆様に別れを告げ、浦白駅に向う。突然の訪問者を、あなたかく迎えて下さった後藤氏をはじめ御家族の方々には感謝のことばもな

い。
相模原を出発して早や十二日目。北海道の旅をいよいよ終りに近づいた。幸い天候にも恵まれ、チームワーク良く知床・大雪・雨竜沼と元気に歩き通すことができた。この旅は成功であったと思う。そして、旅行中、各地で接した人々の暖かい心は、今尚原柏性を保つ知床の山々、あくまでも広々とした大雪と共に、いつまでも私の心の中に残ることだろう。列車は間もなく札幌に到着する。

(倉地記)

花あり・温泉あり・ちんたら山行紀

(爺ヶ岳と鱧温泉へ)

小宮 豊

今回の山行は当初は8月4日から入山する予定であつたが、あの大台風が8月1日に襲来し、榎田パ
ーティとも合流不能となつたため、3日間遅らせ、
7日から入山した。日常の行いのよさなのか、晴れ
男なのか、ちんみに1979年の白峰三山縦走の時
も私の誕生日になると今まで降つていた雨もうその
ようにあがり、晴れわた
つたのであつた。という
わけで大町よりタクシー
で扇沢へ向つた。(タク
シーの運転手の話による
と、下廊下で遭難したパ
ーティを乗せたんですよ
。ま、たぐ縁起でもな



冷池より剣岳を望む

い。

今回のメンバーは倉地さんと私の二名という寂し
い構成ながら天気には恵れて始まりました。扇沢か
ら柏原新道を三時間四十分かかり種池まで登りつめた
が、夜行の疲れや重荷(当初の食料計画の一部変更
であつた)、あるいは一年ぶりの山行のためもあり
多少バテグミであつたが種池からのながめは正面に
立山・剣、左に針ノ木、黒部湖という絶景であり、
疲れなどはふきとんでし
まう。そこで美しがるう
種池をさがしてみたが、
みえるのは小さなまっ黒
な水たまりである。これ
がなんと種池なのだ。こ
こでランチを取り、爺ヶ
岳を経て冷池へと向つた。



キレット付近より鹿島槍をのぞく

ビールだけを樂しみに歩き、〇時三十分に冷池へつく。せまい天場にテントを張り、ビールを飲んで昼寝をする。夕映えの剣がひとしゆ美しく、今日の疲れをいやしてくれる。明日はいよいよ念願の鹿島槍である。

二日目は小雨の中を午前四時五十分に冷池を出発し、美しい稜線とお花畑の中を鹿島槍へ向った。だいに天候が回復し、視界がひらける頃、鹿島槍へついた。美しい双耳峰を足早に上り、八峰のキレットを通過し、五竜への登りにさしかか、た頃から雷鳴が轟き出し、雷雲との競争になる。鹿島槍とは対象的に男性的な岩肌の五竜の頂上に〇時三十分につく、空は今にもちぎたさうであり、

雷鳴もだんだん近づいてくる。五竜山荘までは雨に降られずにすんだが、テンバについて



五竜山荘

油断したのがまずかった。テントを設営もせず、ビールを飲んでいるとドシャぶりの雨……

三日目は唐松岳を経て鐘温泉への行程である。唐松山荘にはカヌテラスがあって、本物のコーヒーが飲めるそうです。このあたりでは比較的軽装の人々

も多く、下山への誘惑にかられながらも不帰のキレットへ向う、思っていたよりモスムーズに通過した



マクサ

が、天狗の大下り（登るのだから大登りである）の登りには開口した。

天狗の頭付近では白、イオウ色の岩石がゴロゴロとしており、正面の鐘ヶ岳は雪が降ったように眩しいばかりの白い岩石がおかわれていて玄想的な風景であったが岩のすきまにはコマ草が

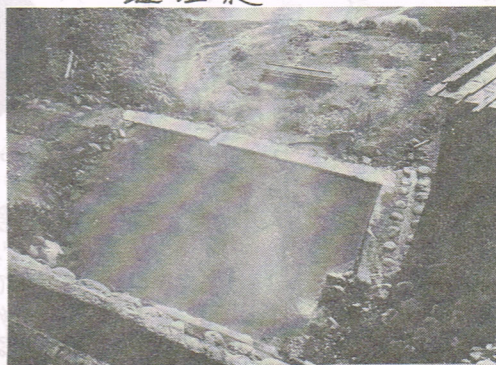


不帰 キレット

色どりをそえていた。トウヤクリンドウ・タカネバ
 ラとコマ草と競っていたが、稜線とはお別れし、鑓温泉
 へ、またまた雨空になってきた、大出原では色々な
 花が咲いていたが、特に美しいのがハクサンコガク
 ラである。ずっとながめていたが、天候が気にな
 るので足早に立ち去り、なんとかすべり込みで鑓温
 泉へついた。この鑓温泉は日本一の高い所の温泉で、
 エメラルド色のすんだ美しい温泉である。景色も豪
 快であるが、唯一の難点は山小屋の真下にあり、手
 る見んの点である。(残念であるが女湯は別にあっ
 て、囲いの中なのである?)温泉につかりながら汗
 と疲れを洗い流した。イイキモイ

四日目は猿倉へ下山したが、途中はシロウマアサ
 ツキ・タテヤマウツボグサ、クガイソウ・イワオウ
 ギ、クルマユリ、ハクサンフウロ、タカラコソウな
 どの白花で埋めつくされていた。このコースは花と

鑓温泉

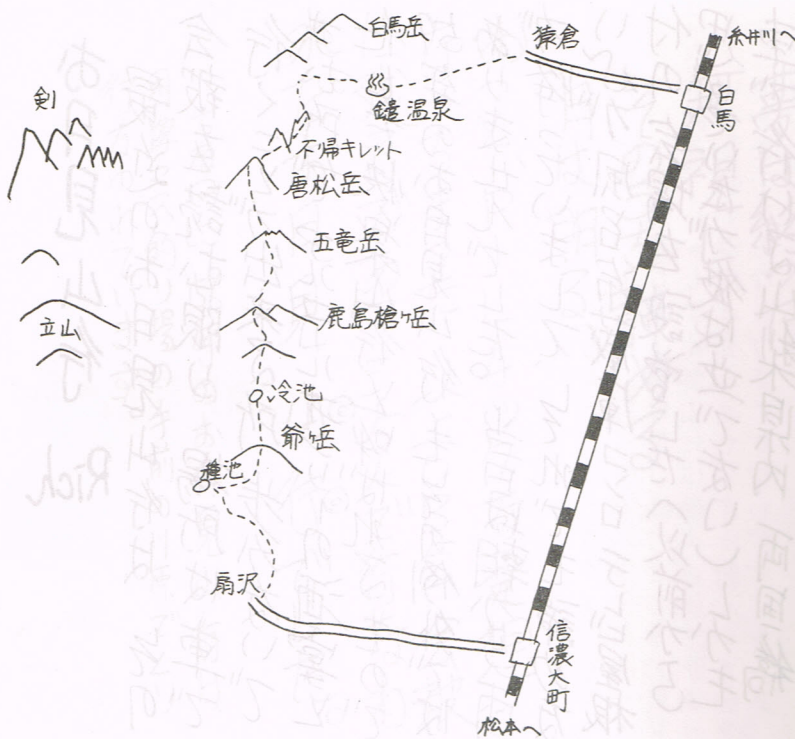


シロ白馬駅へ。

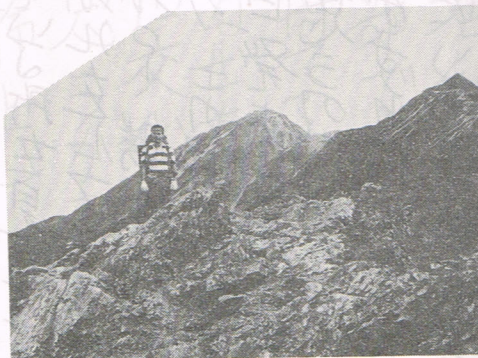
今回の山行はまあまあ天気恵れ、花には大変恵
 れ、ほとんど午前中で日
 程を消化してしまふとい
 うことに山行であつた
 が、実に二人ではもった
 いのないような美しさでし
 た。



温泉の好きな方には是非
 御推薦したいです。とこ
 ろで、このコースの行程で
 すが、エリアマップには
 二時間と書いてあるのだ
 が、実際は三時間はゆう
 にかがるコースですので
 御注意を、猿倉からタク



近頃、山行といえば温泉・ビールがセットになっ
ていなければ物足りない……実感。
PS. 筆がしょろしょろになつてしまひ、昨年の原稿はパス
してしまひ、申し分けなかつたです。



8月9日	8月7日
五竜山荘 5:00	大町 4:50
唐松岳 7:20 7:30発	扇沢寺前 5:30 5:50発
天狗山荘 12:00 12:10発	鍾池 9:30 10:10発
鍾温泉 1:00	爺岳 11:10 11:20発
8月10日	冷池 12:30
鍾温泉 6:30	8月8日
猿倉 8:45 8:55発	冷池 4:50
白馬駅 9:20	鹿島槍 6:30 6:45発
	五竜岳 12:30 12:50発
	五竜山荘 13:30

お日見山行

Rich

最近のお日見山行は、その
会報を読む限り、場所は車で
行くことが出来る所、歩かないで
すむ所で、アルコールの酒宴と
化した快楽山行と叫ばれたもので
57年のお日見山行もその例外では
ありませんでした。当日は朝から雨
が降りていました。それでも諦めな
いのが風呂屋蔵庫フロアに屋根
付の会場を設営したへ以前から
思っていたが彼は世でないし、かま
車で行ける山梨県内、両国橋
酒をしたらたまたま飲み干し、お日見
シヤムセッション参加者5名録音
までして即興的に歌いまくった
左のリードギターがとて光った、心の
ソロギターもいかしていたが、Rのハ

モニカはいまいちだったな、○のカセ
ットテープから流れるさ、心は以の出
来ないライバルだった、なかなか歌っ
てくるところを見たことのないAがボー
カルをしていたが、どのような音
か？ 勝手に想像されると困る
が、この録音までしたテープが後
日発表されることはまだないし
思うので、私なりにこのテープをリ
カすれば、とてもリズム感あふれ
た、ウルフルな音の表現だった
と思う。メッセも主張もなく
参加メンバーがそれぞれ音泉木
に至る気もちだけを持ち、必然
性も動機もないまま、いかにも
一般大衆が喜びそうな音
をたてつけたただけだったか
とて、も人間臭い、真以する事の

出来ない中味の無い爆発的な音楽であった。

バンマスはたれか

みんなエンタテイメントヤ

夢は終わった

無視しろ

そのうち諦める

月は明るく

おっと、パールタックな発想になっちゃった以上OB会会報に残るであろうと人で行なわれたお日見山行でした。

ちなみに65年のお日見山行は国際マス釣り場の手前の川原で行なわれていました。

相山協30周年

Rich

あれはまったく金の無駄使いと言えてよい？ 30周年を一つの契機としてこれからのOB会は積極的になその活動に参加して協会内部での発言力を強く持てる様に期待する。
なせなら協会内部の新旧交代の時期が今だと思っから（現役員の老齢化）

低迷山逍遙

榎田 一典

昭和58年という年は僕の人生にとって、少なからず忘れられない年である。学生生活を抜け出し、就職へ就き、8人の子どもの達の人生に介入し、評価する。本当にこんなでもないのだから、いやいやいはずが、なれない。もともと他にもしてあげられることは山ほど積まれている。それにしても俺はいつの間にかえらくなつたんだ云々。昭和58年はそんな、自分の置き場所を見つけて葛藤した年であつた。

そんなわけであつた。と強引な接続詞だった。かしら。今年、山行を振り返つてみても、あまり自ら進んで登つた山というものは見当らず、どちらかといふと気分転換的登山が多かつたようである。もちろんそれで満足できるわけもなく、あの泥臭い南アルプスパワフルな永遠なれと常に思いついて、23歳（？）なのである。しかしまあ低山には低山の趣きがあり、そういう意味では僕の登山のやり方に新しい方向をうち出した（そんな大げさでもないか）一年でもあつたのだ。

小檜山（一七三メートル）

勝沼あたりからいつものように周囲を眺めると、金峰やあのとんがった乾徳に遠慮するように丸くなっている山が、気をつけていれば見えるはずである。高さこそないが登ってみても実際これと言つてとり

えのない山なのである。以前土曜の夜にアルパインガイドで見つけ、一人で行ってみたいうかと考えていた山になんとなく行くことになった。（その時は天気が悪くて川端風に言うところウジャジャア、た。ち。やうど小宮さんと千秋さんが安達太良山で、本当の空をさがして寡黙的登山を楽しんでいた時の話である。日程の閑係上そちらに参加できなかった僕は、今年から酒の席以外にも積極的に行動を開始した。Y・中里と手を組んで電話で賛同者を求めた。すると意外な人物、例の沢井君といつもの佐藤さんという若きカルテツトが誕生したのである。何でも沢井君は就職が決定したとのことで、それではワインを持って山の上で祝いの宴会をやることになつてしまつた。Y・中里がいればそこは酒の席なのである。

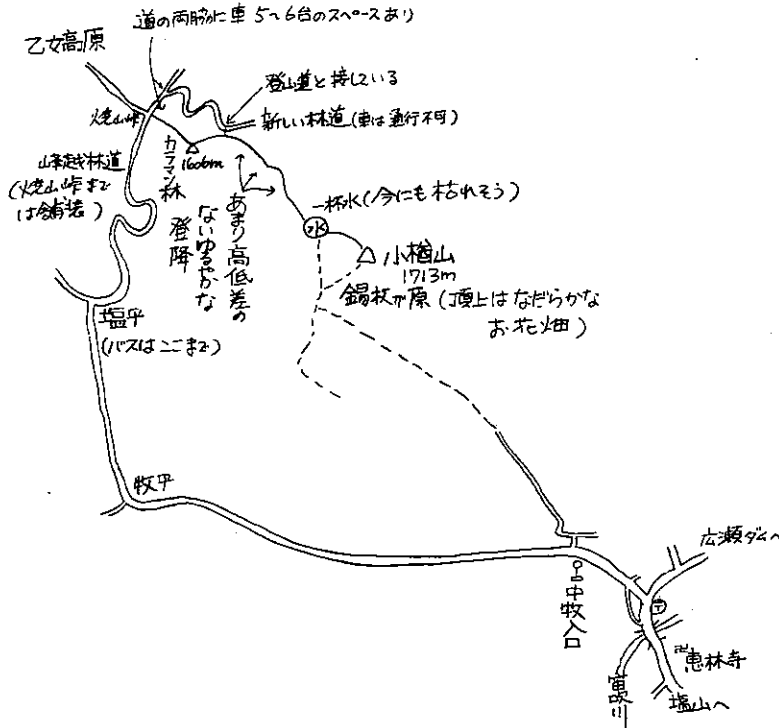
10月9日午後、雨もあがつた中央高速を我が愛する白のジェミニGは大の男4人を乗せて、かつたる。そう、走つていた。倉地さんに聞いたところ、小檜山ではO・B会もお月見をやつたことがあるとのこと。とで、へい、え、昔はちやんと山に登つたんだネ。昔の人は偉かつたネ。なんて感心しながらワインを買たりした。ウー、ン、いい山だよ、まあその時は電車の中ですでに酒を飲んじやつてあまり覚えてないんだ。だけどもね、へへへ、倉地さんのうつつ向きがげんのモゴモゴとした口調を思い出す。普通に中央本線で行つた場合は、塩山からバスで塩平・洞雲寺行きに乗り、中牧入口で下車し、そこから登山が始まる。我々はできるだけ奥へというところから峰越林道をたどって、小檜山を後ろからせめたのである。焼山峠で車をす

で、大衆勝な山を求めらるなら、最高の場所である。

所は、大衆勝な山を求めらるなら、最高の場所である。

ば、大衆勝な山を求めらるなら、最高の場所である。

車、オフロード、バイク、津久井にも似たような



その2

茅が岳 (一七〇六メートル)

故深山久弥氏はこの山を「宿題」と呼び、いつか登らなければ、と思つていた。その通

いは、茅ヶ岳とは、深田氏は、遊つてしまつたのだか、その通

り、茅ヶ岳とは、そんな山である。別名ニセハケ岳とされ

もが考へてゐる、そんな山である。別名ニセハケ岳とされ

よばれてゐる、そんな山である。別名ニセハケ岳とされ

山は展望台といふ、特集に紹介されるほど、眺めが

よくて、冬でも雪の少ない登山道である。奥は昔登つたんだ、へへへ。

と、倉敷の夜中、山だ、オレは昔登つたんだ、へへへ。

十一月某日、レンタカー八人乗りのキャラバンで

夜おそく出かけたのは、倉敷さん、嶋崎さん、小沢さん、佐藤

さん、川崎さん、中里さん、榎田さん、若木さん、小沢さん、佐藤

運動で、すか？メンバーを見ればわかるであらう。エ

キサイテイグ・ドライバーの好カイドが、そろそろ

ますから、地元、先づ、津久井ハイウェイを、テール

をドリフト、中央、高速を滑走、ピンク・ポインツは正

に切り抜けた。中央、高速を滑走、ピンク・ポインツは正

んで、右折を知らせてくれるが、ヘソまがりなキャ

看板が、右折を知らせてくれるが、ヘソまがりなキャ

ラバンは、右折を知らせてくれるが、ヘソまがりなキャ

山特有の、タラシと折して、裾野を登り、徳坂の町を通

りぬけると、登山道は近い。裾野を登り、徳坂の町を通

先客が、茅ヶ岳の原は、近いうちに、テントを張つて寝ていたが、

雲か山か区別がつかない白い固まりがそれらしいのです。
元旦の蛭ヶ岳には入れかわり立ちかわり登山者が現われ、そして頂上を一つの点としてそれぞれ別の運命に向かつて離れて行きました。

※原稿が異常に遅れ、会報が合併となつてしまいました。反省しますので、みんなも反省してください。



ファミリーハイキング

諏訪部信一

昭和五十八年六月五日、朝六時。枕もとの目覚し

時計が鳴るのを聞いて、しょうがなしに起る。弁当

を作って、子供達を起して、自動車に乗ったが、も

う予定の八時半になっていた。駅までは車で二分。

信子に急にしろがふ、橋本駅前へ。そこには何んか

が集っていた。今日は、

OB会のファミリーハ

イキングの日である。

榎田さんかふ、コース

の概要を聞いて、何台

かの車に今集、一路、

石老山の麓へと出発す

る。初夏の白差しの

中を津久井湖畔を通り



三ヶ木を過ぎ、麓の駐車場へ。OB会も発展したも

ので、駐車場には津久井郡代表のような佐藤君が駐

車場の整理？を兼て、我々を出迎えてくれた。

車から降りて、足元の準備をして、総勢十五名は

一路石老山へ出発。道はアスファルトの舗装道を小

川に添って登っていく。農家の庭先を見たり、季節

はずれの菜の花を見たりしろがふ行くと、少し林の

中へ入り、病院の中庭のような所へ出る。アスファ

ルトの道はここまです、そこにトイレと水場がある。

そこで休憩をして、今度はいよいよ山道を登りはじ

める。最初、林の中の石畳のようなところを通り、

谷へ下り、再び登りかえすようになる。木々の緑は

濃く、葉の向かふこぼれる六月の太陽の陽はキラキ

ラと輝いているようである。しばらく行くと道は急

勾配になり、岩が階段状になった所もあり、一汗をかく感じがする。そのうちに、広い所へ出たと思うと山寺へつく。ここまでは別の道を通ると車が入れるらしい。石老山という名前も関係があるのかもしれない。ようなお寺は、すうび良い休憩地である。総勢十五名中、子供が五人、その他にも、子供同等の人が数人いる為、過半数が子供のこのハイキングは非常ににぎやかである。お寺の休憩地からさうに一登り、尾根道へてコースは続いている。気温は高くなっていく。吹き渡る風はさわやかそのもので、子供達も元気よく、大はしゃぎで歩いていく。



途中、野イナゴのたくさんなっている場所があったり、やうと着いたと思ったピークが頂上をかつたり大騒ぎをしながら登っていく。尾根道から、一度鞍部へ下り、少し急な道を登りかえすと頂上である。頂上は、コースから少しはずれていて、他のグループも多勢来ており、にぎやか、その上、頂上は赤土の為、ホコリもひびかったので、我々は少し下ったところで休憩。休憩になると次々にお菓子が出てくるので、それをパクパク。頂上をすぎると尾根道がつづく、赤土の為、すべったり、こすんだりしないように、子供の手を取って歩く。途中、立派な



展望台があるが、そこからは相模湖が眼下に広がり戦国大名になった気分である。展望台を過ぎると道は谷道となり、少しいくと水場もある。大きな岩の向を流れる水でのびを溜し、のんびりと下山する。しばらく行くと林道になり、キャンプ場が見えてくる。大きな池のあるキャンプ場のセンターを過ぎるとアスファルトの道になり、車も通っている。アスファルトの道を右に曲って、車に注意しながら行くと、相模湖ピクニックランドの正門前へと出て来るのである。朝、車を降りた駐車場まではバスで行ってもよいが、歩いてみすべの距離である。アイスクリ



ームを左めをかし、しばらく行くと、朝の出发点である。出発が十時、駐車場着が十五時と、一日のハイキングとしては、非常に手ごたえをコースだと思えます。当日は、白曜日の為、三ヶ木へ行く道路は車が渋滞、橋本駅へ着くのに時間がかかると思っていました。津久井の佐藤君の道案内の為、あつと言う由とはいかないまでも、順調に車を走らせ、橋本駅が十七時解散となり、ハイキングを終了しました。会友からは渋谷さんが参加してくれましたが、より多くの人達と行くハイキングは非常に楽しく、家族全員での参加をこれからも積極的に進めて行きたいと思えます。それにしても、佐藤君や榎田君のアレンジの苦労はたいへんと思い、感謝しております。今後もし若い人達の内部から、我々、所帯持でも、子供をつれて参加できる企画を次々と実行してくれることを期待しています。

だ、一、番、前、で、映、つ、い、た、よ、う、だ、
 か、き、く、し、さ、れ、た、か、の、は、メ、グ、え、ん、に、
 が、つ、て、い、る、の、だ、一、人、ぐ、る、に、恥、か、し、
 ふ、さ、い、だ、つ、て、あ、な、た、の、顔、は、一、億、人、を、
 の、前、に、公、開、さ、れ、た、の、だ、(、) も、つ、て、
 も、後、ろ、に、さ、れ、た、ふ、ま、る、さ、り、見、え、
 有、く、な、つ、し、ま、う、が、炭、を、壁、で、
 い、た、り、が、奔、野、さ、ん、顔、は、映、し、て、
 ふ、え、ず、お、居、だ、け、。実、は、こ、の、人、に、変、
 な、く、せ、が、あ、つ、て、。鮮、う、と、だ、め、分、け、
 と、な、く、キ、ス、を、す、る、の、で、す、。や、ろ、所、
 ま、し、た、お、れ、ま、す、も、。I、く、I、の、教、室、
 に、い、つ、た、う、氣、を、つ、け、る、こ、と、で、す、が、
 も、し、か、し、た、う、倒、の、病、氣、も、さ、分、も、
 一、あ、ら、う、増、田、さ、ん、も、下、山、で、す、分、。一、
 お、ば、ん、を、つ、れ、て、こ、り、お、ば、ん、も、I、
 へ、I、な、ん、だ、て、。日、の、夜、に、メ、グ、
 ち、ん、と、い、し、よ、に、小、屋、に、遊、び、に、い、
 と、を、に、い、た、り、で、す、が、こ、り、人、人、
 と、り、つ、を、あ、い、あ、が、へ、た、存、の、で、は、
 い、か、と、思、い、れ、る、う、だ、つ、た、。精、神、
 的、に、さ、が、し、い、環、境、に、い、る、よ、う、に、思、

の誰う、人年が誰をい
 の時相も知らないとい
 のだけども、対面にある山岸さん（左）
 を知るわけにもない。その人、
 かしうんが、おれに聞いてもら
 たいらしい。主として無視するの
 も悪いから右の耳だけで聞く。左
 の耳はメグとどん・英野先生（この人は
 人と先生だそうか）もう一人暗く
 てよくおれが、こゝにまた内装
 うな女性（年齢の推定不能でも
 若いような気がする。顔は夜、目も
 よくない。）たゞの誰を聞く。こ
 のことの方がおもしろいのだ。
 おはんの誰かは、なんかいま一
 よくない、適当にあしらう。左の
 オデは、英野さんがメグちゃんをく
 どいて、いるのである。ようす
 がふられて、いる。当然、そ
 酔っているのだ。笑ひどくと思
 て、山岸さんが、誰をかえよう

①「さう登つて、
②「今日二人へしてしまふ。た。
う。阿弥陀の北東、隆倉（田中）なんだろう
てきたよ。」
③「それは、昨日行つてきた。」
④「じゃ、ジゴ、昨日は、行つた。」
⑤「これも二時前に行つた。」
⑥「赤坂南峰、ジゴはよし。」
⑦「阿弥陀のついでに行つてきた。」
哀個心、あたりにぼんやりかんじ。
⑧「まあおもしろい、いけいさばん上。
まぐい、く、な、よ、下、降、が、む、ず、か、し、
く、な、る、や、
な、ん、で、念、誑、し、て、お、い、て、人、り、思、考、
ま、る、で、無、視、し、か、し、こ、こ、か、ら、見、る、
大、同、心、は、あ、お、い、が、ぶ、さ、る、や、う、に、
見、え、ない、壁、全、体、が、ハ、ン、グ、し、て、い、る、の、に、
で、は、な、い、か、と、恐、ろ、の、大、迫、れ、ず、
ある。冬、の、西、日、を、こ、の、最、後、の、光、を、
は、な、つ、岩、に、は、二、つ、の、ザ、ッ、ガ、見、え、
て、い、た、我、ろ、は、大、同、心、望、根、を、不、る、
こと、に、し、て、一、集、団、を、す、る、と、下、が、
る、重、さ、う、な、荷、物、を、背、負、つ、て、お、つ、

さうおつ、ちゝ尾根道を登。てくる
着がいてる、ちゝは「
どげにえ、行くの？」と。
と、「たゞね」といふ。
道が続く。「へ。」といふ。
「ここぞぬけて行かないでか。」
「これ左を越えるのだした、」
りろけだぬえ、と大団心を指し
やする。
「普通道の道はないからか。」
「一般道の道はあるよ。」と言つ
て北方の尾根を指す。「このあ
こん汗びしょ濡れ冬なのに、あ
ぶわえ、あぶわえ、息もふぅー
いで、ござ苦勞さんずす。」
「変だとは思いませんでした。」
「いや、急ぐ悪い道だ
なとは思つていたけれど、見
一変だと思つたら、地獄だね。」
こりとんとこころ音が降る
ないもんぞ、沢や岩端石種の道がある。

（終）

いたる所にすきでいる。
 うくはつをりして、
 もうすこし慎重に行き、
 たい。いくし初心者、
 危険な所はい、
 る人だ分る。まじ、
 来て、こころ、
 けて、な、
 事故で、
 もまきこま、
 下まで、
 「まあ、こころ、
 うめ、こころ、
 か、よ、
 外見、
 れ、
 ない。方が、
 きだ。方が、
 るよう、
 「デント、
 「いえ、
 若葉、

しろく、
 のです、
 な失敗、
 とまあ、
 あちこち、
 にまた、

三、何を思っ
 リング。不
 イミング。不

た、
 一日、
 一、
 へ、
 なり、
 危ない、
 通に、
 しろ、
 は、
 この、
 るは、

端物で。
 「今日、
 「いい、
 (ア、
 て、
 も、
 「中、
 ま、
 と、
 「ふ、
 は、
 「別、
 「あ、
 よ、
 と、
 ね、
 ま、
 も、
 た、
 母、
 に、
 さ、
 ず、
 こ、

る、
 を、
 「お、
 さ、
 と、
 「あ、
 お、
 「、
 (今、
 だけ、
 い、
 な、
 ま、
 な、
 「こ、
 ん、
 は、
 何、
 ち、
 ろ、
 思、
 も、
 ん、
 は、
 装、
 人、

一月二十三日（日）の夜、わがオースターで江成、秋山氏、そして榎田氏を乗せて中央高速を飛ばして、一路、相池をめづいた。順調に走り五時頃、木崎湖のほとりに到着し、そろそろチエーンを付けようと路側帯に車を寄せ、作業を終了し、さあ、出発と思うやさき、ギヤーが全々入らぬ、セルを使、てもうじこうともしないのである。ちくしょう、ボロ車め！一同、前後策を考え、結局、修理工場があくまで待つことにする。仕の一文で、八時まで待った。その間、スキー場へ向う車がたえず走り消えて行く。八時になり松本日産に電話をかける。九時までにほそちらに行きますとのこと、一同、一案心、しかし、九時が過ぎても一向に来る気配がない。二度、三度電話するがなりのつぶてである、どうを

やして、江成さんが徒歩で修理工場へ向った。一時間程してやっと車が来る。三時間も待たされ頭にきていたが、この場は波風を立てないほうが無難と思ひ、またも仕の一文で。

その場では修理不能と判断され、けん引され修理工場へ。電車でも使、てスキー場まで行くことを覚悟したが、意外と早く修理された。クラッチの油圧シリンダーの弁がいかれていたので、一万数千円ナリ、これまたイタイ。しかし、これで一件落着、心気一転相池へ。

相池高原への登りで軽自動車が道から半分ほどのりだしている。しかし、バスにより引き上げられ、まずは一案心。相池高原のゲートを通過した頃、正面からバスが来たので、よけようとブレーキを踏んだら、車は自然と路方へ、ついでに雪の壁へ接触、人のうわさは恐ろしいもの、田圃の中に落ちたと

誤放されてゐる。そして無事に宿に着く、しかし、宿には妻さんしかいない、「今、若者がいないのでどの部屋かわかんレ」のこと、結局、ホールで着換えまですはひとすべり。

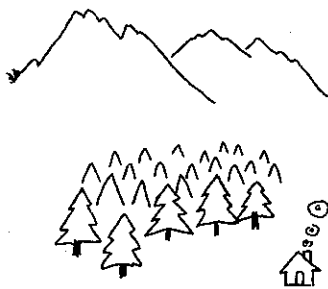
今日は気分が乗らないので早々と宿へもどる、夕食をすまし、ビールを一杯、元氣を取りもどしナイターへ向う。美しいカクテル光線の中では陶酔で自分のスキートの腕前が上がったと錯覚し、気分が爽快である。宿へ帰りひと風呂浴をが、江成さんと榎田は猫肌なのか、風呂の湯が暖かい水なのである。

風呂からあがり、私が安眠していると秋山さんら三名は人の寝顔を酒の肴にいいたい放題、よだれがたれたとかたれなひとか、「ちゃんときこえていますよ。」

二十四、二十五、二十六日と三日間、雪は質、量ともに申し分なく、平日でもあるので思う存分、滑

走でき、上級者向きの馬の背コースにもチャレンジしたか、ほとんど横滑りである。それから、テレギヤビンのイブなんですが、少し値段が高かすぎますね。しかし、棚地高原は広くてコースもバリエーションに富み、白馬連峰も周近にみえ爽快です。

今回のスキーは色々とアクシデントが多かったがメンバーの個性と天候に恵まれ、すばらしいスキーでした。



尾瀬山行

諏訪部 信一

朝、子供達を起して、車で十六号を走り、十七号沼田から大清水へ。大清水着十一時、五十九年九月二十一日、平日の為、駐車場はガラガラ、食事をし、いよいよ出発。相模原を出発した時はあまりよ

くなかっ、大天候も回復し、秋の日差しが照り、元気一杯、四名は出発した。一三瀬着二時、三平峠着五時。普通のコースタイムの倍の時間がかかるが、梓は一生懸命に歩く。三平峠へかかるころからか



スがかかりはいぬ。ここで雨でも降ったが大変である。天候を気にしつつ、急ぐこととする。三平下から長蔵小屋へ。ガスがかかり、暗くなりはいぬ。道を天気を気にしつつ歩くのは長く感じられるものである。それでも、

無事六時には長蔵小屋へ到着。オ一日目の行程を終了した。

大清水から六時頃の行程である。初めての本格的山行にしては梓は良く歩いたものと感心した。長蔵

小屋は風岩もあり、平日のことであってもゆったりしていた。子供達は食事をし、風岩へ入ると、すぐに霧の中へ散歩に出かけてしまった。



九月二十二日、オニ

日は雨で始まった。

朝、起きてみると雨、

食事をして、すこし

様子を見ることがす

る。九時頃、少し天

候も良くなったので

出発することとする。

雨具を着て、キナラ

パンをばいて準備の

K。苗は雨具を着て、しゅい子の中へ。霧雨の降る

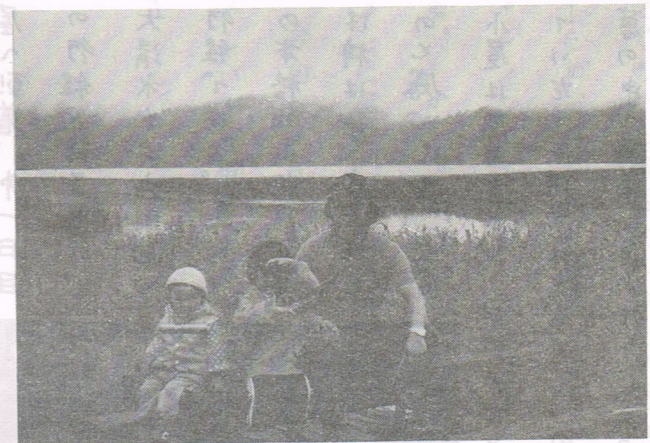
中を沼尻へ出発。雨ですべりやすい木道を歩いて二

時間、十一時沼尻着。早目のお昼を取ることにする。

雨で休憩が出来なかった為、沼尻の休憩所、少しの

んびりとする。休憩後、白砂運原へ行くことにする。

ほとんどの人に合うこともなかったが、さすがに尾瀬



のメインストリート

である。沼尻のあた

りでは何人かの人と

すれちがう。白砂運

原着一時。休憩の後

沼尻へリターン。今

度は沼尻より、沼の

南側を通って帰るこ

ととする。天候は少

し良くなった来りい

るようである。南西岸遊歩道は人気はまったくなし、

もうセンゴクを見たり、イモリを見たりしながら二

時間で三平下へ到着。出発してかじ七時間を歩いて

来た時はさすがにつかれの様子である。三平下で、

ジュースを飲んで、ごきげんを取って、残り一時間

昨日歩いた道を長蔵小屋へ。長蔵小屋到着は五時、

行動時間八時内を消化して、小屋へ着くと、蓋と二人でふざけていた様。雨の中をよく歩いたものだと感心しつつオ二日目を終了した。三日日、九月二十



三日は快晴の天候と人の声が始まった。休日の為、夜行で来た団体の人達が多数入山して来ていた。食事をし、八時に長蔵小屋を出発。入山と同じコースを通って下山。帰りも、昔通のコースタイムの倍を見て下山。大清水到着は十一時半であった。平日の為、入山者も少なく、小屋もわりと空いていた。天候に恵まれ良かったが、子供達と一緒に楽しい山行をすることが出来た。

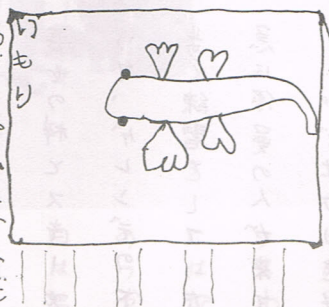
帰りは大清水より沼田を経て、水上温泉へ行き、温泉で一泊して、汗とつかれを流してから、翌日、九月二十四日、相模原へ帰宅した。

参加メンバー 諏訪部 信一

千秋

梓(五才)

茜(三才)



いもり
あずなやんは、おせ
にいて、じやしん
をこって、そのしか
つた。いもりは、お
はあやんのこころ
へち、つきもかった。
あずな



上越スキー

諏訪部 信一

ひさしぶりに休暇を取って、家族でスキーへ行ってきました。OB会の人達にも一緒に声をかけたのですが、遠慮したのか、きづかれたのか、ともかく同行する人がなく、私達家族四名のスキーとなりました。出発は二月十九日、当日は日曜日ということもあって、早目の出発を考ていました。が、実際に車が動き出したのは六時半であった。八王子インターのそばのファミリーストランで朝食を取って一路十六号線を川越へ。川越から関越自動車道で前橋、そして、十七号線へと入っていった。道は順調で、沼田をすぎてもチェーンは不用、十七号線から谷川方面へ分枝し、少しいったところ、チェーンを着装、目的地の水上温泉へ到着は十一時と非常に早いペースであった。旅館で着換えをして、車でゲレ

ンデへ。もっとも、スキー場を特に調べてないので、旅館で聞いたよ、大穴スキー場が良いとのこと。

温泉場から東へ十五分ぐうづスキー場着。ところが、お天気は良いのですが、ものすごい風。スキー場は雪煙が舞い、子供とスキーをする雰囲気はまるでなし。日曜日の為、人も多いし、ゲレンデではスキーの競技会も開催中とあって、たいへんな混雑。

長女の梓とスキーをばいて、ゲレンデの下で歩く練習をしていた。急に係員の人に来て、ロープで仕切りをはじめ、ここは距離競技のスタートになるので横断してはいけないう。私はともかく、娘



は、はるか遠くまで、スキーをはいて、風のビュービュー吹く中を回り道する事は無理。しばらく見ていると、さつともスタートしないので、棒をだいて

コースを横断。そんなこんなで二時間ほどで旅館へ帰ってしまった。もつとも、旅館はいつもの民宿と違って、温泉に入っているばかりと、言うことで、スキーより大切かもしれません。そんなこんなで、一日が終り、二日目は月曜日、子供達も早起きで、八時には朝食をとり、ゲレンデへと出発、子供達はソリとスキー、私達は長靴をはいて、交代でゲレンデへ。最初のうち、

ソリもあまりうまくなかった様は、あつと言う向にソリを乗りこなし、苗を乗せて斜面をスイスイ滑り出している。本人達も滑れるようになると楽しいらしくて、大騒ぎをしながらのソリ遊びであった。



ゲレンデは月曜日の事もあって、がうかう、お客が少ない為、一部のリフトは運休中。子供がいなければ、勢いなくなると滑りまくると思いつつも、子供がよるこんでいるのを見ると、あき

ふめもつき、交代で長靴をはいて、走りまわることになるのである。四時頃には切り上げて、宿に帰り、昨晩は車のつかれもあり、早目に寝たので、今日は温泉街へ出て見ようと、子供達をつれて、夜の散歩に出かけた。実は、棒も苗も、この水上温泉は二度目なのである。昨年、尾瀬の帰りに寄って、

山行の汗を流していったところの為、今回もスキーと合わせて、アフタースキーの楽しみを持って来たのである。何しろ、前回は射的やスマートボールをやりに、すっかり、その味をしめていつている二人

なのである。(ニオの子供に射的やスマートボールを教えた親も少ないが) 楽しみにして出た街は雪の為、どこも閉店となり、子供も親も残念がったことしきりであった。しかし、やむなく、旅館へ帰り、明日を楽しみに床に入った。

翌日も出発は早目だ、天候は暖く、キルティングは不用で、春スキーの感じすじすじ。高枝生の団体

遊びが多いゲレンデで

最終日は杖も茎もリッ

トで上へ上って、スキー

やソリイゲレンデの上

かゝの大滑降である。

杖のプラスチックスキー

はエッジがきかず、途

中かふみぞの向へ入れ

て滑つてりした。



今回、子供の手袋やゴ

ーグルは現地のスポー

ツ屋さんで購入した。

相模原をびびり子供

ものかなかなか手入

らないが、地元は生活

用品としても使う為か

安く、良い物が多く

あった。スポーツ屋の

話しでは、地元では保育園でもスキーをやったこと

と。五才用のものもそろってあり、来シーズンには杖

にきくとしたスキーをばかせて、いよいよファミ

リースキーの開始である。心残りはあるが、時由

とちり、旅館へ帰り、温泉で汗を流し、手打ちソバ

を食べて、一路帰宅の道を車に順調に走った。



筋右衛門漫遊記 (二)

骨皮 筋右衛門

フィンランドの首都、ヘルシンギのターミナル駅に列車はゆくりゆくりすべり込んで止った。荷物でふくらんだドロミラのザックを肩に担ぎホームへ降りた。何本ものホームをぬい大きな鉄骨つくりのドーム屋根が覆っている。「ひまわり」とか「オリエント」急行殺人事件に似た、ヨーロッパを舞台にした映画によく登場する駅の風景がそこにある。見送りの人、別れを惜しむ男と女。そんな中で我々だけが異質に感じられる。モスクワまで一緒だった者のほとんどはモスクワからパリやアムステルダムへ飛んでしまった。

改札口を出ると、そこからはすべて自由である。バイカル号から共に旅をしてきた仲間も乗客も居ない。言葉も通じない。岸田と二人で取り出された所持品になった。加えて、モスクワへの飛行機に端を落としている我が尻のオデキが痛み出し、坐すていられない程になつてしまつていた。駅の近くの安ホテルを岸田が見つけてきてくれて、そこへここが打ち込む。そしてそのままベッドにグウンしてしまつた。

岸田は街へ出かけ、スーパーで食料を買ひ込んできてくれた。パンにバターをつけてかじり、紙パックのミルクを飲む。いや、飲むとうんた。パンの口を開き、コップに移そうとするが出てこない。それはヨグルトであつた。日本的感覚からするとそれはまさしく牛乳のパンクだ。ただ、なにしろフィンランド語など読めはしない。二人でいが笑ひしなから、すばいヨグルトをスプーンで嘗めた。

翌日、いまでも寝ている寂しいかたないで、岸田の手で手術を決定してもらった。オデキに焼いた針で穴を空け、膿を絞り出すのだ。なかなか膿が出ないらしく、何度も針を刺し、おもしろい振るので、その痛さに顔は油でじじりである。あとは持参のペニリン軟膏を塗りこんで終りだ。四日ほど寝ておもしろい、腫もひいた。すっかりヘルシンギ通になつた岸田の案内で街を見て歩きながら休まりをする。

八月八日、ようやくヘルシンギを後にしてヒッチハイクを開始する。手を上げるとよく止ってくれるが、ヘルシンギを離れるに従つて車の数が少なくなるのが難点だ。人口の少なさと自然の豊かさには感

嘆するばかりだ。フィンランドの南部には山が無い。道を走っていて見えるのは針葉樹林の林と点在する湖ばかりである。所によつては湖の中に林が、そこ、道が走り、橋によつてかうつてなづいてるようにも見える。びしめれの国。フィンランドはそんな印象を受けた。かつて大國の足によつて何處も蹂躪された国とは思えないほど、今のこの國は静かで平和である。途中で右つた町は小さく、静かで一時間も歩けば中心街を一週でできてしまう。

我々は北上してボスニアをぐるぐる回ってスウェーデンに入ることにして、いたのだが、乗せてもらった一台の車がバーサという港へ行くという。そこからスウェーデンのウメオにフリーポートがあると聞き、急ぎまコスを支え、港まで乗せてもらうことにする。このへんがヒッチハイクのきまきまな点だ。

フリーで二時間余、スウェーデンに入つてこれから南へヒッチを始める。短距離に何台もぶつかると、時間ばかり食ふてしまふ。五キロ行そ降ろされ、十キロ走つては乗り換える。小さな町の一角でなかなかつかまらない車にうんざりしていると、金髪の女の子がやて来て、こちらをものめすらしそうに見ている。こんな田舎では東洋人はめずらしいかもしれないが、こちらだつて見るものなんでも新鮮である。「ハイ、ハイ」と声をかけると、はすかしそうにしながら寄つて来る。「エミ、エミ」といふので、声をかける、それに答えて来るので英語はダメかと思つて、突然、「The house is full of love」といふ。日本人だと答えると、東京からか、と聞く。めんどくさいので、イエスと答えると、神奈川の相模原だ、なんていうのは、アメリカ人に故郷はと問うたら、ペンシルベニアのハリズバークだ。なんて答えて帰る来たのに等しい。白人の金髪女性は美しいと思う。オラリと背が高く、腫が透んでいる。これはコブレンクスの裏がえしであり、話す言葉もついたりたたりたりとなり、「ボストオラスを知っているかい」なんて質問したら、「ついでこい」といふ。道すがら十八才ぐらいかなんて思つたら十五才だといふ。ヨロバでは男女とも思つたありなり三才若いと考えればあつた。そのぐらゐ大人な顔に見える。また僕自身も若かたからそう思つたのであつて、今はまた違つかもしれないのだ。

ヒッチを再開して、途中でタやみせまったある日。僕たちは野原でエンルトをかぶつて寝袋にもぐり込んだ。経費節約のためと、そのつもりで持参した装備を生かさなない手はない。食料もそのつもりで途中の町で仕入れてある。今度の旅は単なる観光旅行にしないため、スウェーデンはいさかい

といふも多少の金はあるから無銭旅行とも違ふが。違ふがある程度の長期滞在を決めているから金銭節約しなくてはならない。その点宿泊費ゼロの野宿は大いに助かるわけだ。出発前からそれは覚悟の上で、ガッの中にもその他にコロ、コナル、食器、ボリタン、菓品一式、裁縫道具、着換え、生活用具が二そろい入っている。考へてみると、山行の装備とそう違はないわけで、靴だけが軽いハイキングシューズである。山の生活技術、というよりワグネル精神が今回の旅に生きている。スタートホルムへはヘルシキから四日であつた。北欧のベニスといわれるだけであつて、美しい水の都である。日本の五月下旬を思はせるようなさわやかな気候に、公園では色とりどりの花が咲き競つている。港の帆船がワグネル・ボートになつて美しさを添えている。二日は市内のユースホテルに泊り市街を歩く。このスタートホルムには長く滞在してアルバイトで稼ぐ日本の若者が多かった。それは賃金がいからであるが、加えて「リーゼン」に代表されるような日本人のゆがめられたスウェーデン感から果てて来た者もいたのだらう。今この国はバカンスの季節だ。国産車ホルムの後に大きなキヤンピョカーを引いて人々は太陽と自然を求めて移動している。もともと我々から見れば、スウェーデンもそうだが、このスウェーデンもちよと町をはずれば自然だらけなのだ。人口の少ない先進国のゆとり、と思へるのは日本人の、いやこの前右衛門のひがみかも知れない。

て、とりはやくレストランででも働けばいい金になるのだらう。反面旅行者にとつては物価が高くて閉口させられる。安そうのレストラン(日本で言う大衆食堂ぐらいのもんだらう)を見つけた食事をしても15フローネ(約千円)もとられるのだ。十年も前の物価である。我々は一日も早くこの国を出ることに決めて、ヒッチを続けた。

南下してコペンハーゲンに入る。このコペンもさほど大きくなく、美しい街だ。子育りのような楽しく、にぎやかな遊園地もあるが、ただそればかりは落ちついている。ヨーロッパにはパリやロンドンのような大都会にはそれなりの良さがあつたが、もともと小さな街、このあと訪れたドイツのリュール・ベックとか、オーストリアのザルツブルグにはいわゆる、古いヨーロッパの街のたたずまいがあり、歴史的古ヨーロッパを感じさせてくれた。なぜそうした小さな街が落ちついた寒風を残しているのか。もちろんリール・ベックとかブレーメンのように観光都市として、中世ハンザ同盟の雄としての自由都市のたたずまいを法によって守っているという都市もあるが、それだけではない。いくつもの要因を上げるならば、まず人口が急激に増減しないこと、日本のように異文化の急激な吸収がないこと、そしてそれらに加えて、より一層重要であると思ひ、興味をもつたのは建築である。何百年も昔に建てられたレンガや石造りの街並み、家々が外観にさほど手を加えずに現在も住めるという

ことだ。日本で木造建築の家並みを保存してしている木曽路の町など、どのくらい町や村の財政から補助金を出しているか。そしてその保存地をも二本の街道に面してわずかに数メートルの地区にすぎない。もちろん建て換えは経済を活性化させる。けれどもそれでは何人の資産を残さない。こうしたヨーロッパの街の商店の「ウィンドー」には十四世紀の石造りの建物のカラーサンの窓枠がはめられていたりして、はなやかさはないが、落ちついた寒風になつてゐる。なぜ十五世紀とわかるか。それは礎石に三〇×年と彫んであるからだ。

話がだいぶそれてしまつたが、我々はコペンを離れて、それぞれ一人旅に出ることになった。岸田の兄の友人がパリに居り、そこにごちやうかいになることになった。だが、二十日後にその住前で落ち合うことにした。岸田には旅立ち前からはいぶく世話になつてしまつた。そういう事も含めて、我々は今回の旅を精一杯やってみたと思ふ。一杯のニヤミスはやはり何人差を含んでおり、それが当然だ。岸田には岸田の旅をする自由があり、お互いが自らの力で旅をする経験も必要なのだ。

またヒッチというのはい人の方がやりやすい。自分かドライバーになつてヒッチしよう。道の端ついで無粋な男が二人、汚いザクを持って親指を上げていたとしよう。乗せてやる気になるか。まして運転手が二人の場合、二人も乗せると、(へんやとして)という不安がつきまとい、二人で乗せると乗せたくても乗せられないのだ。この辺はヨーロッパの若者は心得ていて、というよりヒッチ慣れしていて、待つ場所・時間など案に要領がいい。ある時、こんな事があった。車は良く通るが乗せてくれない。三十分も待つが止ってくれない。一台の車の運転手が何か叫んで後を指差すので行ってみると、道の合流地点、車がスピードを落すところで、七八人のヒッチハイカーが順番に手をあげているのだ。僕も合点し、またあきれて順番の後へならんだ。

パリでの再会を約して私は西ドイツに入った。一人になると全て自分の判断と体でやらねばならず、乗せてくれた運転手にも一人であれやこれやと話しかけ、持前に疲れたを感じた。今まで相棒にだけ頼つてきたのかよくわかるのだ。かといって、鉄道に頼る気持はおこらないからあいかわらず道の端で手を上げる。慣れてくると、人との接触が楽しくもなってくるのだから不思議である。

リール・ベックからハンブルクに入つてユースホテルにゐる。かり込んだ。ハンブルクは大きくて賑やかな町だ。木オヤもはなやか。夜も人の行き来が多い。俗に言う「餓り窓」を冷やかに行く。こゝも人の行き来が激しく、その意味でははつきりを感じないで良かったのだ。ヒッチがどうだ。向こうからパフ旅行の日本のオジ様達がジロソロ団体

で歩いてくる。僕はヒビに下向き加減に眼をやり、知らぬふりして通り過ぎて、行き過ぎて、窓の方に眼をやると、——窓にいてもそれは通りから大きなガラス窓を通じてビルの一階の何もない部屋の中が見える、というだけのものなのだが——ガラスの奥から、超重量級の婦人がウツクする。その瞬間、僕の体の中をゾクとするような悪感があった。大きいといっても限度を通り越しているであろう豊満な胸、椅子に座って堂々と組んだ二つの足。

(ああ、ここは暖地なんだ。)と実感してそこを去った。

ハンブルクからはハノーバーを通過してケルンに入る。人口は多いのだから高い建物がないので、大聖堂がひととき大きく見える。ゴシック建築の代表みたいなこの大聖堂は、中に入るとその大きさ、特に天井の高さには驚いた。むしろ中世に僕が生きていて、このカテドラルでお祈りをする、なんていうことになつたら、カトリック信者などというより以前にその威厳と権威の前に弱る、子羊になつてしまふだろう。うがた見方だが、どんな宗教でも必ずこの辺の民衆の弱さを知っていて大きな建物を建てる。(その時は、教祖の教えや教義からだいが時がたち、その宗教が社会的な影響力を持てしまつてゐる時なのだ。)ケルンではないが、やはり大きなカトリックのカテドラルでパイオールの響きを聞いた時は、その音響効果のすばらしさに聞き惚れてしまった。眼で見て威圧され、耳から信じさせられる。まさに演出効果は満点だ。

そんなケルンの街で、もう一つ感心させられたのが街のつくりである。中心の商店街が十字交に歩行者用のフロムマーリになつてゐる。そのころ日本でも歩行者天国などというおもむきの名前が流行した。また、このケルンの街で、いそみればここは永久天国なのだ。しゃれたレニガ通り、街路樹、そして天国が交差する中心には大きな噴水が上がり、ベンチの回りでは子供がハトにマメを投げてゐる。アイスクリーム売りの屋台に混つて長い髪の若者がギターを弾いてゐる。ギターケースにはコインが散らばつてゐる。いづらの櫓さにもなつてゐないようだ。車中心の都市生活の中で、ここなら何時間でも車の走る音を聞かずに買物や散歩が楽しめると思つた。もちろん青空を遮るアーケードなどはない。

夕食には一軒のレストランに入る。レストランだと思つていたら、そこはビアホールだった。みんな大きなジョッキを手にして、立って飲んでゐる。ビールなんか飲んでゐる経済的余裕はないと思つてゐるうちに、そこにレジがあつてオヤジが注文はと聞く。専ら次第で「小さいのを」と言つたら、小さいのはないと言ふ。わいわいやそいふのを見回すと、なるほどみな大きなジョッキでやつてゐる。そういうところ

ち僕の前にはもう解から注がれた大ジョッキの生ビールが置かれ、泡がカウンターに流れ落ちてゐる。注文は「オヤジが言ったのは、ビールを飲むのは当然で、何を食べるか、それか、そのソーセージにするか、というところに近いらしい。大学のオーストリア語だとは言え、ドイツ語なんて、大用先輩に出かける前に教つた、ライヒツェンバールト、フンデルル、しから知らないし、ソーセージにどんな種類があるかなど、親光案内書にも書いてはなかつた。まじまじと見て、近くでやつていたオヤジが英語で話しかけてくれて助けてくれた。つまり俺の食べてゐるソーセージがうまいからこれにしろ、という事なのだ。出てきたやつは大き過ぎて熱くて、ものすくなくマツた。料金は前金制でその安さにもおどろいた。揚げたてのポテトフライも注文して、すっかりお腹になつてしまつた。オヤジさんが喋れない英語でいろいろと聞いてくる。こちらもビールの勢いで文になつてないいつもの英語でしゃべりまくる。他の仲間が何かドイツ語で質問するのまで通訳して聞かしてくる。疲れるが、楽しい一時だった。

ケルンの話はこのくらいにしよう。アウトバーンのピッチでケルンからは一日でスイスのバーゼルに入ることができた。ここはドイツ・フランスの国境にも近く、スイスの北の玄関ともいえる町で、落ちついた中にも活気がある。Y字に荷物を置き、明日からの旅のための情報集めの「街ぶら」に出る。

またまた余談になるが、そもそも数あるスポーツの中でなぜ登山だといつても続ける気になり、今でも山へ行きたいと思つたのか、と考へてみる。どうも汗を流して登り歩く、あの嗜虐性がたまらないのではないかと思う。対戦相手のいる球技などとは違つて勝負がない、そのかわり、登頂、などのサテイス・アクションを求める。要するに自分にはサテイス・スト・なんだと思つたりする。スポーツの場合はやはり闘争本能が強くなければ上達しない、山も同じ面がある。ところが僕の場合は、強引に上り下りする変化好みのようだ。山でも同じで、甲斐信長は六つのルートを経験したように、ルートが異なれば同じ山でも何度でもないのだ。まあ山が好きなのは、大なり小なり同じかも知れないが、そんなわけでは変化好みは旅にも色濃く出たなあと思つてゐる。今にして思へば、バリエーションとサテイス・アクションと複合がその結果を生んだのだとも言える。

パリで岸田とおち合うまでスイスを回つてみることは、決めていた。明日からの旅はやはり、山の好きなき者にとつてのあこがれのスイスであった。

OB会の歩み

今までの十五年の会報から

諏訪部 信一

昨年、一年の最後の月、十二月に入り、クリスマス
の飾り付けや、正月の話題があさちで月に入るこ
ろ、一通の郵便物が私の手元へ届けられた。内容は
相模原山岳協会の三十周年記念の為に、記念誌を作
るので、OB会も会の内容をPRする原稿を出して
ほしいとのことであった。当時、会も会報十三号の
編集準備中で、資料を集めはしたものの、結局原稿
を書くこともなく月日が流れてしまった。今回、会
報十四号を企画するに当り、よく考えて見ると、私
達のOB会も今年で十五年である。発足当初からの
会員は数も少なくなり、会の運営も若い人達に受け
継がれて行っている。会の歩みは、その時、そこに
参加した人達の思いとして、今も心の中に残って

いることとは思うが、写真やその他の記録の管理も
されないまま、十五年が過ぎてしまったと考えると、
少し残念な気がする。会報は現在十四号を発行しよ
うとしているしと思つて見ると、私の手元に創刊号
からすべてがそろつていたので、少ない資料ではあ
るが、会の歩みを整理しておくことに、気が付いた
しだいである。会の発足からの私個人の歩みでもあ
り、他の人の記憶と多少違う点もあると思われるが、
私なりに整理をしたつもりである。

OB会の発足は一九六八年三月となっている。な
つていたと言うのは、正確には、私も記憶にないの
である。創刊号にわ一期会長である石井好一さんの
「OB会の発足から現在まで」と言う文が見られる。
私が会報九号に書いた「私の事」と言う文にも、私
の記憶による、泉相ワネルの発足、そして、OB
会の創設の経過が書かれている。OB会は一九六八

年三月、県組二期生が卒業する三月、一期生のOBの向から発案があり、会として発足したのである。

しかし、会費は三ヶ年間で五百円の通信費のみとし、行事の毎に費用を集めて運営されていた。一年後、

三期生の卒業を迎え、OB会の入会時期と同時の四月、相模原市民会館の一室を借りて、発会式及び新入会要歓迎会が実施されたのである。

一九六九年四月十三日、午後一時より、市民会館

三階の会議室に参加者二十数名を集め、発会式、

歓迎会、総会が実施された。当時は規約もなく、世

話人のような役員を置いたOB会であった。五月、

OB会として最初の五月合宿が実施された。前年、

会として発足したにもかかわらず、会としての合宿

等の行事、山行は特別なく、前年五月に私と石井好

一、大用知也の三名で奥秩父を雲取から金峰まで縦

走したりで、他は個人山行ばかりであった。オ一回

五月合宿は神ノ川、広河原で現役と合同で実施され

た。参加人員は十八名、五月二日に先発隊が入山し、

BCを設営、同日、本隊、現役隊と合流、五月五日

特集・神ノ川合宿

参加者

○行前表

○自宿

○相模原市市民会館

○平石沢

○仙谷湖行

○丹沢合宿(現役組)

○平石沢

○エビラ沢湖行

○丹沢合宿

原 道子
鈴木博子
飯沼信一
石井好一
倉地哲郎
大門紀子
大用知也
金子恵子

○伊勢沢湖行
○平石沢湖行
○神ノ川合宿をまとめて

石井好一
小島信男
石井好一

集されているが、沢を中べとした合宿が実施されて

いる。そして、八月、会報創刊号が発行される。創

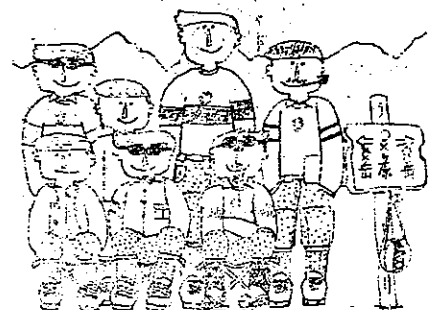
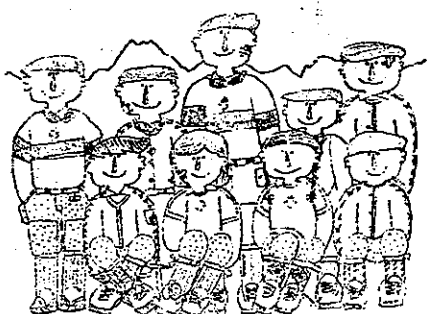
刊号は、かり版印刷の三十五ページ、編集後記には、

自分達の会報を作る喜びが正直に表れている。

OB会発足以降、二年五ヶ月、一九六九年八月三

は、会員
名簿が収
録されて
いる。
会として
の、最初

の記録である。当時は会の活動もワンダーフォーゲルの主旨を考へて、ユースホステルを利用して、大陸、能登半島、福井、高山への旅なども実施していた。一九六九年七月十三日から二十二日まで、参加四名、費用一万二千円の報告が会報にのっている。創刊号が発行されたころから、会の中にある動きが出てきた。それは、会の方角をきめ了大きな動きとなっていた。一九六九年十一月二十三日、相模原

[illegible][illegible]

その内、奥相模湖でのキャンプ、第一回スキーが実施され、第二回五月合宿は水無川で第一回同様、沢を中心にしたスケジュールで実施された。会員数も増し、会の柱である規約も出来、活動にはずみがかさうとしていた時、一つの事件が発生した。一九七〇年、十一月二日、会員六名で実施された山行で転落事故が発生、大事にはいたさなかったものの、

一部新聞にも報道され、地元山岳会の救助隊が集合したりする事件があつた。事故は、自力下山した為救助隊も出発することなく、処理されをが、メンバ―の犬飼さんが骨折、萩原君が転落の際に頭部を切り出血という結果であつた。参加者の報告によると、死亡事故に在る可能性も充分考えられたといい、結

名簿（会館等に於てに確定してゐる人達）

[illegible]

事であった。その為かどうか、発行の遅れていた会報二号も発行され、一九七〇年十一月より、矢部の青少年会館で定例会が実施されることとなり、会の基幹が整備されて来た。

当時の

会報に目を通すと、

「OB会

を斬る」

（原道子

）、「ユ

ースホステルに思う」（倉地哲朗）、「逃避の本能

（現代の大衆登山と登山家の逃避意識）」（萩原進）

「登山考」（諏訪部信一）と、何となくむずかしい

タイトルの文章が多く、会報を通じて、会の運営の

方向等について、いろいろな論議がかわされている。



1970年 現役夏合宿にて
(中岳にて入江先生と)

となり、一年間の
勉強の時も必要
に実施するには、
画されたが、実際
目標をつかみ、計
事として、大きな
始される。会の行
画され、実際の

の先生のア
ントとして
のOBが参
いた。
一九七一
十九日、前
計画され、
近づくになっ
ていた富士山一
周ワンデリング
が南



1970年 現役夏合宿
(奥穂・白出ゴルにて)

シスタ
何人か
加して
年六月
年より
実施が

会は当時、現役の練習にも参加し、夏合宿には顧問

ブランクがあつたのである。しかし、六月十九日、富士急線、東桂の駅を出発したニパーティーをかわ

きりに、次々と

実施にうつされ

ていった。その

向、「やまぐつ

三号が発行され

一九七二年三月

には、小沢明夫

氏のコーナーによ

り、最初の本格的な雪上訓練が谷川岳で実施された。

富士山一周ワンデリングを実施しながら、五月合宿

や夏合宿を実施、一九七二年七月二十八日から八月

二日にかけて、大房君、千草君が会の夏合宿の一環

として北アルプス白馬から後立山、裏銀座、上高地

徳本峠という大縦走を実施、会員の向に話題を提供



1971年7月7日
三ッ峠～清ハ～御坂
(富士山一周ワンデリング)

YAMAGUTSU
YAMAGUTSU

3 1971

SWVOB

したものであつた。会の活動は順調に進み、一部の
会員の人数から神奈川県岳連加盟の話が出はじめ

OB会長名簿

第1期	石井好一	第43.3~第44.4
第2期	小島信男	第44.4~第45.4
第3期	天羽静夫	第45.4~第46.4
第4期	石井好一	第46.4~第47.4
第5期	倉地哲郎	第47.4~第48.4
第6期	大用知也	第48.4~第49.4
第7期	大房利男	第49.4~第50.4
第8期	萩原直義	第50.4~第51.4
第9期	千葉典義	第51.4~第52.4
第10期	諏訪部信一	第52.4~第53.4
第11期	諏訪部信一	第53.4~第54.4
第12期	諏訪部信一	第54.4~第55.4
第13期	諏訪部信一	第55.4~第56.4
第14期	諏訪部信一	第56.4~第57.4
第15期	諏訪部信一	第57.4~第58.4
第16期	諏訪部信一	第58.4~

たのもこのころである。又、山行届けの用紙が整備され、個人山行であっても、山行届を提出するようになった。富士山一周ワンデリングは年毎計画として実施されたが、三年目を迎えた一九七二年となっても完結せず、会員の内部にドラドラムードが出はじめたりしてきた。そうしていつに年も

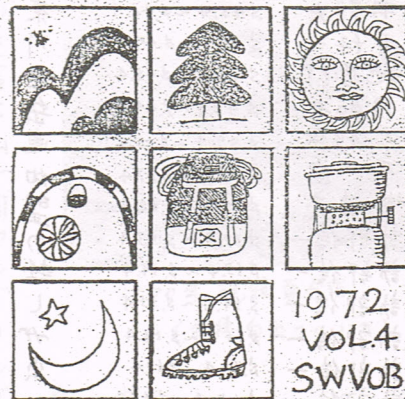
発行	8	予定
44.	12	
45.	12	
46.	3	
48.	3	
49.	3	
50.	3	
51.	3	
52.	3	
53.	4	
54.	6	
55.	8	
56.	6	
58.	3	
58.	8	

明けて、一
九七三年三
月には会報
四号も発行
され、会報

の中で特集的に取り上げ、会員全体にアピールを実施、それまで、一年目が0、二年目ハパーティー、三年目、三パーティーとジリ貧状態であったのを、最初のハパーティーに引き上げ、一期に完結させたのである。活気の出つた活動は、五月合宿もそれ

まづの丹沢重視から、秩父へとうつり、夏合宿も会の正式パーティーとして、南アルプス、北アルプス

やまぐつ



え面へと出かけて行くようになった。しかし、会員の増加に反

して、会計

は火の車だ、

会費の滞納

等も多く、

現在の課題



発生の原点がすべに見えはじめている。当時は定例
 会を実施したあと、車が湘南方面へ食事に行くこと
 も多く（当時はまだファミリーストランというもの
 はなかった）それが楽しみで集っていた人も多かつ
 たと思う。一九七四年三月、会報五号が発行され
 かり版印刷の会報は、原稿の集まりの悪さにもか
 わらず、毎年発行されていた。会員数も五十名を
 越えようとしていた。一九七四年九月七日、前年の
 十二月に完結した富士山一周ワンデリングの報告上
 が、富士山で実施さ
 れた。当日は、ニグル
 ーに介れ、富士吉田
 から登るパーティーと
 新五合目から登るパ
 ティーの集中登山では
 あったが、時間的に向



題づ九合目づ合流、大きな目標の完成を祝ったもの
 である。
 会の活動
 は総会に
 始まり、
 新人会員
 歓迎会を
 かねた五
 月合宿が行われ、



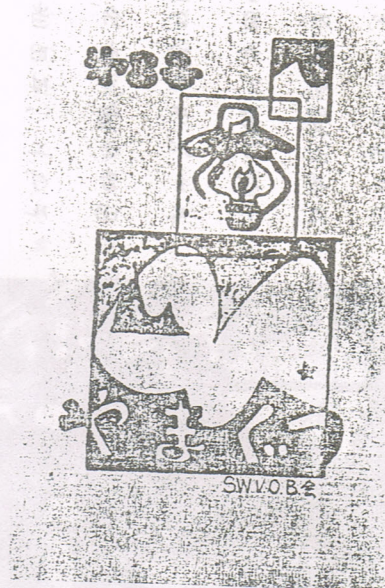
見山行、正月合宿、スキーツ

夏の会宿、お月

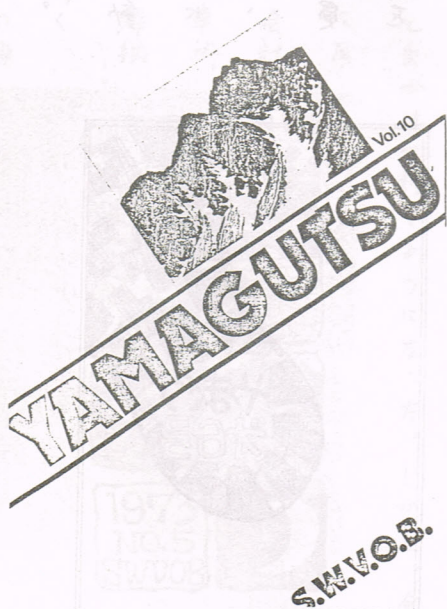


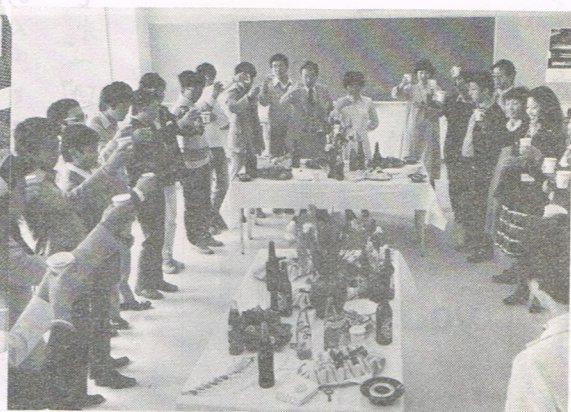
下へと進み、会報を発行して一年を
 終る。一九七四年から一九七八
 年当時は、会としても
 活動の調整
 期に入った
 ような感があっ
 た。大きな事業
 を一つ終り、会
 の活動も軌道に乗り、
 会員は全国の山へより

一層精力的に出か

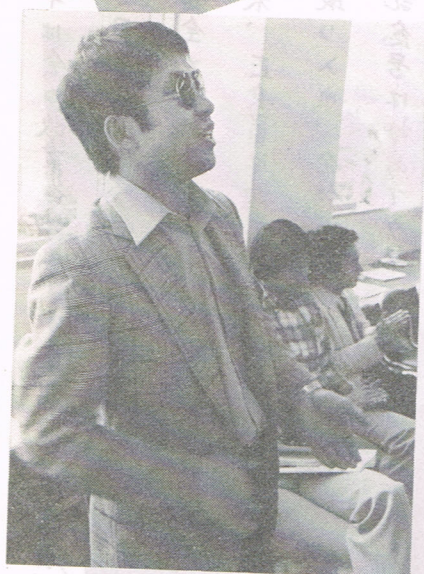


けていった。会報も六号、七号、八号、と発行され
 ていったのである。一九七八年、OB会は十周年を
 迎えるようとしていた。前年、安定した活動を終了し
 た会は、十周年を迎えて、会員の名簿の作成や、記
 念式典の準備に着手、それまでの全卒業生に連絡を
 取り、名簿を作成、一九七八年四月二日には、橋本
 公民館において十周年記念パーティーを実施した。
 当日は四十数名という非常に多勢のOBが集合し、
 一日中、なごやかなパーティーを実施した。



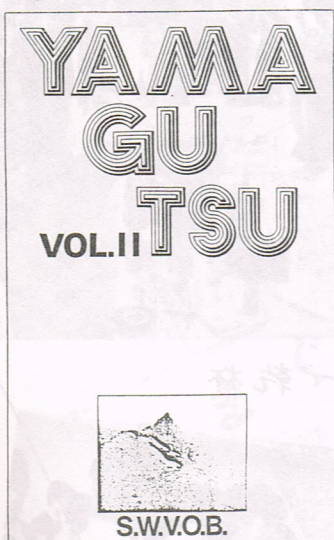


全員で乾杯

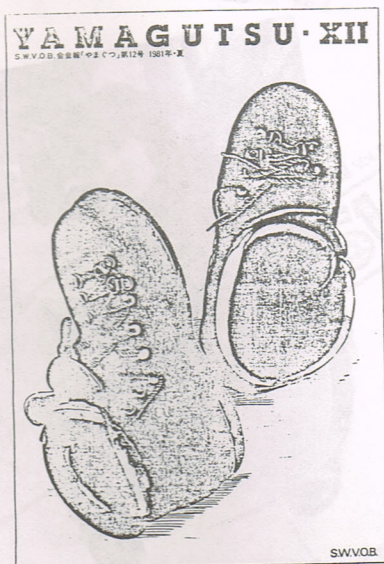


十周年記念パーティー





十周年の記念行事と反面、その年は会の改革の始まりでもあった。会費の滞納等にも目を光らせ、会計からの督促を強化、資金的にも健全な会の運営を目標として動きはじめた。その結果、正会員は四十名程度に縮少、新規に会友制度を取り入れ、全体の調和を目標とした。一九七九年、記念号は初めてタイプ印刷され、十号として私達の手元へ届いた。会友の人達との交流を目的としたファミリーハイキングも第一回を一九七九年六月に実施、定期的に行なわ



第2回 ファミリーハイキング
峠の薬師
55.6.

れ、家族全員での参加を目標に毎年実施されている。結婚をして、子供が誕生すると自今の時間が少なくなりやすいが、家族を3つてのファミリーハイキングは、若い会員の人達

にも参加してもいい、楽しい一日となっている。



第3回ファミリーハイキング
丹沢ヤビツ峠
5.56.6.

OB会は十
五年を経て、
今も少しづ
つ進歩して
いる。創設
期のような

急激な流れとは言えないが、若い人達のバイタリティーと、社会人として生活している人達の知恵とがバランスよくミックスされて、行動のエネルギーとなっていて。一高等学校のク



ラブのOB会が、独自にこれほど活動に活動している例はあまり耳にしない。一九八三年五月、遅れはしたものの、会報十三号が発行され、その遅れを取



り戻すように、同年のうちに十四号が発行されるようとしている。会報は会の歩みを記録した財産である。私が長々とこの文を書くに当り、会の資料の非常に少ないのに気がついた。今まで十五年間の歩みが、会報がもしなかったら、記憶の外へ消えていってしまったことと思う。私

は、会報の重要さというものを、このページを作る
 ことによって、いやと言うほど身に知らされた。最
 近、OB会としてアルバムを作り、山行や業事の年
 真を記録することになり、少しずつではあるが実行
 されていると思う。会の流れは川とにている。川の
 源流では、清水が湧き出し、流れを作る。水は急激
 に沢を下り、変化を持ちながら大きくなっていく、
 やがて安定した流れとなり、大きな川となると、お
 だやかに、静かに流れる。OB会はまだ沢をすぎた
 程度の川である。いつの日かドナウ川やボルガ川の
 ように、少しの障害は押し流すくらいのかを持った
 大きな流れとなっていくことだろう。しかし、その
 大きな流れも、小さな、砂や土の中にすいこまれて
 消えてしまいそうな、清水の流れから始まった事を、
 急激な流れの中で、大きな岩に何回もぶつかった事
 をいつも憶えている事は大切なことなのである。

YAMA GUTSU



5.54年 5月

5月 会宿 (ミズがき山頂にて)



5.50年 1月

正月会宿 (ハケ岳にて)



5.51年 8月

夏会宿 (白馬岳にて)

三十年、五十年と年がたぎ、大きな流れの中に身を
 ゆだねている時でも、今日を忘れないうちのもの
 である。



ス.47年 8月 徳本峠にて
白馬～麁銀～徳本の縦走をおく。



ス.55年 9月 上越 苗場山々行にて。



ス.55年 8月
神ノ川キャンプにて

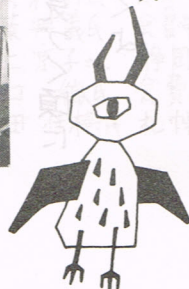


ス.49年 5月 鳳凰三山縦走にて。



ス.55年 1月
正月合宿(ハケ岳にて)

尚、最後に、本文作成に当り、
会報を参考にしましたが、多少
私の勘違いもあると思いますの
で、発見しましたらご指摘下さる
ようお願いいたします。



晩秋に――



遠く離れた友から 手紙が届く

旅の途中からの 消印だ

僕の部屋には 大きなストーブ

あったかそうな ネコの寝顔

FMラジオ ホット・ウィスキー

遠い友からの便りには

季節風の香りがしみこんでいる

日曜日

僕はひとりで 乾徳に出かけた

なつかしいだろ？

銀晶水 錦晶水 扇平

スキの穂に招かれて

二人で焼肉パーティーをやった所だ

華やかな学生時代ではなかったけれど

君のような友は 二人と知らない

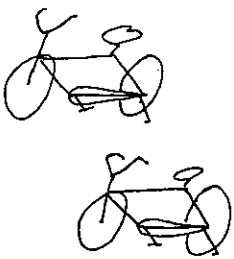
僕の部屋には 大きなストーブ

あったかそうな……

卒業式の何気ない別れが

長い長い別れなのだと 気づく頃に

今度は僕が 君の街へ行くよ



月	日	行 事
4	11	57年度総会
5	1-5	5月例会 ハ・益 - 光ハ・益 (山行企画)
8	5	5月定例会
23	5	母連キ・ハ・益 (山行)
6	19	山小連連キ・ハ・益企画 (山行企画) ← 山小連連キ・ハ・益
17	7	7月定例会
23-24	7	夏合宿 夏の早稲田 (山行)
8	4-10	キ・ハ・益合宿 北カワス尾沢合宿 (山行)
12-16	8	第3次 中央カワス (山行)
14	8	8月定例会
31-32	8	キ・ハ・益 山小連連キ・ハ・益 (山行)
9	18	9月定例会
10	2-3	5月 雨田 (山行)
9-11	9	秋山合宿 山小連連 (山行)
16	10	10月定例会
31-11	10	秋山 (山行)
11	20	11月定例会
21-22	11	秋山 (山行)
12	12	12月定例会
18	12	秋山 (山行)
25	12	秋山 (山行)
31-12	12	秋山 (山行)
1	1	1月定例会
2	4-5	秋山 (山行)
10-12	1	秋山 (山行)
19	2	2月定例会
3	19	3月定例会

58年度 総会議事
 1. 開会の挨拶 (57年度 諏訪部信一氏)
 2. 議長選出 増田義昭氏選出
 3. 57年度行事報告 (各役員)
 4. 57年度会計報告
 5. 新役員選出

会長 諏訪部 信一
 副会長 一般企画 秋山 徹
 山行企画 斎藤 正雄
 会計 泉 篤志
 増田 義昭
 書記 平田 恵
 川島 菊夫
 庶務 中川 雅代
 二瓶 祥
 山行企画 佐藤 通
 一般企画 榎田 一典
 相山協 江成 利一 (30周年記念行事)
 斎藤 正雄 (指導・運営)
 小宮 豊 (常任理事)
 佐藤 通 (")
 県岳連 倉地 哲郎
 現役連絡 二瓶 祥
 森野 誠治

四月十日、午後二時より矢部青少年会館において
 五十八年度総会が開かれました。

五十八年度総会

以上決まりました。

6. 新会員紹介会
 16期 座間 昭博氏
 17期 官崎 伸一氏
 高野 信一氏
 森野 誠治氏

7. 58年度行事立案
 山行企画より... 15周年記念として〒マ山行
 を行う。
 一般企画より... 行事と並行させながら
 山小屋を造る。

以上承認されました。

会員の概動
 7001 大房利男氏 会費帯納 (22,300円) 退会
 7002 千葉典義氏 会費帯納 (25,200円) 退会
 7303 井上京子氏 静岡転居 (結婚) 退会
 7304 山口 徹氏 会費帯納 (28,700円) 退会
 8101 太田 佳樹氏 札幌転居 (北大生) 休会

以上承認されました。

S.W.V.O.B会

昭和57年度会計報告 昭和57年4月1日

収 入	金額	備 考
会費収入	195,188	
会費	210,000	
入会金	2,500	夏合宿、秋山、山小連連
雑収入	1,500	現金収入
合 計	409,442	

支 出	金額	備 考
経理・通信	18,420	経理・通信費
会費	91,015	会費
入会金	49,000	入会金
会費代行	80,800	会費代行
合 計	239,235	

収 409,442
 支 239,235
 繰上 170,207

以上報告します。

会計 泉 篤志

会費 諏訪部 信一

昭和59年度定期総会パブリ

I 昭和59年4月22日

神奈川県立相模原青少年会館 会合室 A.B 午後一時～五時

II 総会議事 議事進行 泉 篤志

α 開会の挨拶 58年度会長 諏訪部 信一

β 58年度行事報告 佐藤 通

γ 58年度会計報告 泉 篤志

δ 質疑応答

ε 新役員の選出

会長(1) 諏訪部 信一

副会長(2) 佐藤 通・榎田 一典

書記 近野 貞子・平田 恵

庶務 新津 正己・小宮 豊

会計 泉 篤志・榎田 一典

相山協 松田 英一郎・二瓶 祥

山行企画 江成 利一・小澤 聡

一般企画 川 篤 菊夫・中里 由穂

現役連絡員 平本 真

県会連役員 中川 雅代

予新会員の紹介

9 59年度の行事立案

総会資料 ↓

月	日	行 事
4	10	58年度総会
	23-24	新人歓迎会および山小屋作業〔一般企画〕
5	1-5	春合宿 北ア宿沢(相山協式典参加)〔山行企画〕
	1-3	山小屋作業〔般〕
	7	5月定例会
	22	山小屋作業〔般〕
6	4	6月定例会
	5	ファミリーハイキング 石老山〔般〕
	8	相山協 若き技術講習会(和上)
	12	〃 (実技・三ツ峠)
	25-26	山小屋作業〔般〕
	25-26	市民ハイキング (役員派遣)
7	2	7月定例会
	10-17	山小屋作業〔般〕
	30-31	市民登山 登山 (役員派遣)
8	6	8月定例会
	2-15	春合宿 北奥道大雪 登山〔山〕
	5-9	〃 北ア会〔〃〕
	10-17	山小屋作業〔般〕
	13-14	キャンプ〔〃〕
9	3	9月定例会
10	1	10月定例会
	9-10	安達太良山・小瀬山〔山〕
	15-16	お日見〔般〕
	30	市民ハイキング 石老山(役員派遣)
11	5	11月定例会
	20	山小屋作業〔般〕
	23	相山協 30周年記念式典 五湖山
	26-27	茅ヶ岳〔山〕
12	3	12月定例会
	10-11	冬年会〔般〕
	28-29	春合宿 17ヶ岳 赤岳 鉾山 ベース〔山〕
1	7	1月定例会
	15	山小屋作業〔般〕
2	4	2月定例会
	14-16	救急法講習会
3	3	3月定例会
	10-11	温泉旅行 木曽〔般〕

S.W.V.O.B 会
昭和58年度会計報告書 昭和58年4月8日

収 入	金 額	備 考
前年度繰越金	170,207	
会費	152,100	
入会金	500	何山
雑収入	22,173	山小屋・登山・宿舎利用等
合 計	451,980	

支 出	金 額	備 考
事務・通信	42,400	切代、印刷代、二ツ峠、宿舎利用、2000代
整備	4,200	自費代
山岳協会	45,000	会費、2000年2期金
雑費	6,860	総会費2代200代
合 計	102,460	

収入 451,980
支出 102,460
繰越金 242,860

以上報告します

会計 泉 篤志
会長 諏訪部 信一

神奈川県立相模原高等学校
ワンダーフォーゲル部OB会規約

第一章 総則

第一条 本会は神奈川県立相模原高等学校ワンダーフォーゲル部
OB会と称し原則として事務所を相模原市内におく。

第二章 趣旨

第二条 本会は原則としてワンゲル活動を通じて会員相互の親
睦をはかり下自然に親しむことをその旨とする。

第三章 活動

第三条 本会は前条の趣旨にそつて次の事業を行なう。

- 一. ワンゲル活動
- 二. 会報その他 関係出版物の発行
- 三. 図書及び 装備等の保管貸し出し
- 四. 関係団体に対する協力ならびに交歓
- 五. その他趣旨達成のための必要事項

第四章 会員

第四条 本会は正会員、名誉会員とつて組織する。

- 一. 正会員は SWV に 二年以上在籍もしくは
卒業時に在籍した者で本会の目的に賛
同する者。
- 二. 名誉会員は役員会が推選し総会におい
て承認された者。

第五条 本会は入会によつてその資格を得、死亡退会または
除名によつてその資格を失う。

第六條 退会はその届出をなし会長の承認を得る。

第七條 本会の趣旨に反し名誉を傷つけ 天下の損害を与
けた者及び会費滞納はなほだしい者は総会ある
は定例会の決議で除名することがある。

第八條 再入会は その届出をし会長の承認を得る。た
し、第四章第七條の規定により除名された者は再入
会を認めない。

第五章 役員

第九條 本会は会務の遂行上 次の役員をおく。会長一名
副会長一名、会計一名、書記一名、装備一名
その他 総会で必要と認めた場合は上記以外
の役員をおくことができる。

第十條 会長は 総会で出席会員の過半数をもって選出し本
会を総理する。

第十一條 副会長は 会長により指名され、総会で過半数の
信任を得、会長の補佐及び会長が職務遂行で
きない場合 会長の職務を代行する。

第十二條 会計、書記、装備は 会長に指名され 総会で過半
数の信任を得たもの。

第十三條 会長、副会長、会計、書記、装備の任期は一年
とし重任はみとめる。

第十四條 役員会は 会長、副会長、会計、書記、装備で組織する。

第十五條 役員会の議決は出席役員の過半数をもって決定する。

第六章 総会

第十六条 総会は本会の最高議決機関とする。

第十七条 総会は毎年一回会長の招集によりて行なわれる。

第十八条 臨時総会は会長が必要と認めるとき招集することができ。

第十九条 総会の招集は開催より十日以前に通告する。

第二十条 総会は会員の過半数の出席もしくはこれに相当する処置を施された場合にかぎり成立する。

第二十一条 総会では会務の報告とす以外次の事項を議決する。

一. 収支予算及び決算

二. 会員の移動

三. 会長の選出及び副会長会計書記装備の信任

四. 年間計画概要の決定

五. その他 総会の権限と決められた事項

第二十二条 総会の議事は出席者の過半数で決定する。

第七章 定例会

第二十三条 本会の運営にあたっては、月一回の開催とする。

第二十四条 定例会は出席者数に拘らず成立する。

第二十五条 定例会は出席者の過半数によって決議される。

第二十六条 定例会その決議は、総会と同等の効力をもつ。

第二十七条 定例会において次のものは決議できない。

- 一、第二十一条一項・三項
- 二、第二十一条四項の変更

第八章 会計

第二十八条 本会の会計は会費、入会金、その他の収入をもって充てる。

第二十九条 本会の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第三十条 会費、入会金については別に細則をもうける。

第九章 改正

第三十一条 本会の規約は会員の三分の二以上をもって改正することが出来る。

第十章 細則

第三十二条 本会の入会金は五百円とする。

第十一章 附則

第三十三条 本規約は昭和四十五年四月十二日より施行する。

○慶弔費規定

第一条 本規定は会員相互の慶弔にあたり、その年度の年間予算より本会全体の意志として支出するものとする。

第二条 正会員の結婚は壹万円をお祝い金として支給する。

第三条 正会員の死亡は、壹万円をその親族にお見舞いとして支給する。

第四条 名誉会員も、第二条、第三条の正会員と同等に扱う。

(当規定は昭和五十三年二月四日より施行する)

○ 会費規定

第一条 当規定は本会規約第八章三十条の規定に依る。

第二条 正会員の会費は下表に依る。

四月一日現在において 24歳以上 一月 七百円

24歳未満 一月 五百円

第三条 名誉会員からは会費は徴収しない。

第四条 会費を十二ヶ月分以上滞納した場合は十二ヶ月分につきそれぞれ一月分の追徴金を課す。

第五条 十ヶ月以上の滞納者には会計は文書をもって通知する。会計より滞納通知を受けた者は速やかに会費を納めなければならない。通知到着日より二月以内に会費を納めない場合には、会計は総会または定例会にその者の除名を提言する。

第六条 その月分の会費は、その月の定例会までに納入することと原則とする。

(当規定は昭和五十三年二月四日より施行する)

—★— 会 員 住 所 録 —★—

会 員 番 号	氏 名	住 所	電 話
6801	諏訪部 信一		
6902	倉地 哲郎		
6903	萩原 進		
7101	嶋崎 三郎		
7102	諏訪部 千秋		
7202	新津 正己		
7301	泉 篤志		
7302	近野 貞子		
7305	井上 富美子		
7401	斉藤 正雄		
7403	江成 利一		
7406	秋山 徹		
7407	泉 桂伊子		
7601	小澤 聡		
7604	悪原 義範		
7701	河本 宏美		
7702	小宮 豊		
7703	増田 義昭		
7704	平田 恵		
7801	児玉 陽一		
7802	佐藤 通		

会員番号	氏 名	住 所	電 話
7803	田中 広志		
7901	榎田 一典		
7902	川島 菊夫		
7903	島野 茂樹		
7904	小林 輝明		
7905	沢井 浩樹		
8001	桑田 菊美		
8002	松田 英一郎		
8003	中川 雅代		
8004	小野 文男		
8102	入谷 裕		
8103	斎藤 正史		
8105	中里 由樹		
8106	二瓶 祥		
8201	石井 賢司		
8202	船石 幸次		
8203	黒川 智弘		
8204	堀木 浩司		
8205	増田 克彦		
8206	横沢 秀和		
8207	平本 真		
8301	高野 真一		
8302	宮崎 伸一		

会員番号	氏 名	住 所	電 話
8303	森野 誠治		
8304	山田 孝		
8305	秋山 達也		
8306	富樫 勉		
8401	富樫 直明		
8402	寺田 義孝		

会 友	氏 名	住 所	電 話
6705	松沢 一憲		
6809	中里 進		
6904	渋谷 恵子		
7014	練間 節男		
7211	大熊 敏子		
7308	井上 久		
7408	出頭 義紀		

編集後記



今回は、異例の14・15号合併号として、皆様にお届けすることになりました。それもこれも、一重に私の非力故に、と申しましても紆余曲折してや、と発行にこまつけたのは嬉しい限りです。想えば、会報の発行を受け負、たのは、O B会に入、て一年ばかりで右も左もわからなかつた頃です。それが早くも、今年は学生生活最後の年となりました。

前号と同様、今回も皆さんの書いた原稿がそのまま活かされます。文体はその人の人間性を示すと言われます。一ペーシ一ペーシの中に、それを数十年(?)のドラマが秘められていると思つて楽しんで下さい。また、次の号でもO B会の方々が紙面で集まつて下さることをお願ひします。

59年 春 吉日

「やまぐつ」 第14・15合併号

発行 昭和五十九年七月

発行責任 諏訪部 信一

編集 二瓶 祥

発行団体 S・W・V・O・B会

団体所屬 神奈川県山岳連盟

相模原市山岳協会

印刷 雄久 社

